

南淡町文化財調査報告書 第2集

岩 谷 遺 跡

発掘調査報告書

1 9 9 5

南淡町教育委員会

卷首図版 遺跡周辺空中写真



序 文

淡路島は、古くは『古事記・日本書紀』にも登場し、島内には先人の足あとともいべき埋蔵文化財が数多く残された緑豊かな島であります。その淡路島の最南端に位置する南淡町も決して例外ではなく、町内各所で少しずつではありますが、埋蔵文化財が確認され、当時の生活の一端を垣間見ることができるようになってきました。今回調査を実施いたしました岩谷遺跡から出土した多数の弥生土器や石器をはじめとする考古資料は、我々の祖先の営みを知るうえで、必要不可欠な資料であります。

現在、淡路島を取り巻く環境は、21世紀に向けてさらなる発展のために計画・実施されている開発により著しく変化しつつあります。埋蔵文化財は一般には地中に存在し、普段人目に触れることが少ないという性格を持っていることから、非常に厳しい状況下にあることも否定できません。そしてこれらの文化財を開発から保護し、次世代に継承していくことは、我々に課せられた重要な責務であるものと自覚いたしております。

今後文化財の保護と開発には、幾多の問題や課題が生じるとは思いますが、関係者の努力により、解決できるものと確信いたしております。さらには本報告書がふるさと淡路を知る社会教育資料として広く活用され、文化財の保護および理解にわずかでも手助けとなるよう希望するところであります。

最後になりましたが、本報告書を作成するにあたってご指導とご協力頂いた方々に対し、紙上をお借りして心より感謝の意を表すとともに、今後ともご支援賜りますようよろしくお願い申し上げます。

南淡町教育委員会
教育長 川野 四朗

例 言

1. 本書は兵庫県三原郡南淡町福良丙22-1字岩谷に所在する岩谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は三原郡養護老人ホーム建設事業に伴うもので、南淡町教育委員会より依頼を受け三原郡町村会が平成4～7年度に調査および整理作業を行なった。
3. 遺構実測は調査員および奈良大学文化財学科学生が、遺構・遺物写真撮影は調査員が行なった。
4. 遺物実測・浄書は調査員、中原美佐子、初田典代、細川光代、神戸女子大学遺跡調査会が行なった。
5. 本書で記す標高は東京湾平均海水準を基とし、方位は座標北を示す。
6. 本書記載の土器の色調は『新版標準土色帳』1993年度版を参考にした。
7. 遺物の番号は本文、挿図、図版ともに統一している。
8. 本書の執筆は三原郡町村会坂口弘貢・定松佳重・馬野徹（現西淡町企画開発課）が行ない、坂口・定松が共同で編集を担当した。文責は目次に記す通りである。
9. 本書にかかる遺物は三原郡南淡町教育委員会（三原郡南淡町福良甲512）が、写真・図面は三原郡埋蔵文化財調査事務所（三原郡三原町市善光寺18-27）が保管している。
10. 発掘調査にあたり、兵庫県教育委員会、地元福良地区の方々、南淡町シルバー人材センター、事業主体である三原郡広域事務組合の協力を頂いた。また、調査および報告書作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を仰いだ。記して深く感謝の意を表する。
（五十音順・敬称略）

伊藤宏幸（津名郡町村会）・浦上雅史（洲本市教育委員会）・大下明（宝塚市雲雀丘学園）
・岡本稔（淡路考古学研究会）・川吉知子（北淡町教育委員会）・貫益巳（淡路考古学研究会）
・波毛康宏（淡路考古学研究会）・菱田哲郎（現京都府立大学）・藤平明（南淡町文化財調査専門委員）
・藤原清尚（高砂市教育委員会）・山本三郎（兵庫県教育委員会）
・渡辺昇（兵庫県教育委員会）

本文目次

序文	
例言	
I はじめに	
1 調査経緯と調査体制	坂口…………… 1
2 地理的環境	馬野…………… 2
3 歴史的環境	坂口…………… 5
II 調査結果	
1 層序	坂口…………… 9
2 遺構	坂口……………10
III 出土遺物	
1 弥生土器	定松……………14
2 製塩土器	坂口……………16
3 その他の土器	坂口……………16
4 石器・石製品	定松……………17
5 土錘	定松……………19
IV まとめ	
1 弥生土器	定松……………20
2 石器	定松……………20
3 土錘	定松……………21
4 製塩土器	坂口……………22

挿図目次

図1 南淡町位置図……………	3
図2 淡路島南部地域埋積切峰面図……………	4
図3 淡路島南部地域水系図……………	4
図4 南淡町内主要遺跡分布地図……………	6
図5 調査区設定図……………	9
図6 調査区平面図および南壁層序図……………	11
図7 LX32 ……………	12
図8 LX06 ……………	12
図9 和田分類による土錘分類図……………	22

表 目 次

表 1	土器観察表	24
表 2	石器・石製品観察表	33
表 3	土錘観察表	36

図 版 目 次

卷首図版 遺跡周辺空中写真

図版 1	弥生土器実測図	37
図版 2	弥生土器実測図	38
図版 3	弥生土器実測図	39
図版 4	弥生土器実測図	40
図版 5	弥生土器実測図	41
図版 6	製塩土器・黒色土器・土師器実測図	42
図版 7	須恵器実測図	43
図版 8	石器実測図	44
図版 9	石器実測図	45
図版 10	石製品実測図	46
図版 11	土錘実測図	47
図版 12	上：調査地近景（南より） 下：地元小学生への説明会（西より）	48
図版 13	上：調査区全景（拡張後・北西より） 下：南壁層序（北より）	49
図版 14	上：L X 32（南東より） 下：P P 13土錘出土状況（西より）	50
図版 15	上：L X 06（拡張前・南東より） 下：L X 06（拡張後・南東より）	51
図版 16	上：弥生土器 下：弥生土器	52
図版 17	上：弥生土器 下：弥生土器	53
図版 18	上：弥生土器 下：弥生土器	54
図版 19	上：弥生土器 下：弥生土器	55

図版20	上：弥生土器	56
	下：弥生土器	
図版21	上：製塩土器	57
	下：製塩土器	
図版22	上：製塩土器	58
	下：黒色土器・土師器・須恵器	
図版23	上：石器	59
	下：石器	
図版24	上：石器	60
	下：石器	
図版25	上：石製品	61
	下：土錘	

I はじめに

1 調査経緯と調査体制

淡路島の高齢化は、近年若者の離島などにより、他地域に比較して進み、各自治体でも21世紀に向けての懸案事項の一つとなっている。その来るべく高齢化社会に対して、郡内の各自治体では社会福祉施設の建設により、地域住民に対して福祉サービス向上を推進している。一方、郡レベルにおいても、すでに三原郡老人ホームは南淡町賀集に設置されていたが、設備等の問題で新たに三原郡広域事務組合により同町福良に三原郡養護老人ホームの建設案が提出された。その計画にもとづき、南淡町教育委員会より調査の依頼を受け、事前に三原郡町村会が現地の視察を行なった。

しかしながら、本地は第二次大戦中旧日本軍の兵舎として使用された後、最近まで福良中学校として利用されていたことから、通常郡内の平野部で実施している踏査による遺物の採集は不可能であると思われた。

そこで日を改めて平成5年3月に、重機掘削を伴う分布調査を試みた。その結果、現地盤より約70cm下層に遺物包含層が形成されていることが判明した。

しかし、本体工事はすでに着工しており、一部5mあまりの盛土がなされている箇所もあった。そこで先の調査成果をもとに遺跡の取扱いについて、兵庫県教育委員会指導のもと、南淡町教育委員会を中心に関係組織による協議を行なった。

協議の結果、本体工事の緊急性・内容を考慮して、すでに盛土が完了している部分は調査対象外とし、コンクリート擁護壁設置部分とその周辺部の調査を下記の体制で緊急に実施することとなった。

平成4年度

調査主体 南淡町教育委員会 社会教育課

調査体制 事務担当

教 育 長 坂川 一弘

課 長 竹田 功

課長 補佐 黒田 要作

担 当 林 光一

担 当 村本みゆき（三原郡町村会）

調査担当 調 査 員 濱崎 真二（現下関市教育委員会）

調 査 員 坂口 弘貢（三原郡町村会）

外業作業員 南淡町シルバー人材センター派遣作業員

外業補助員 池谷 勝典 小柴 治子 佐々木 勝

柴田 太一 長原 亘 信里 芳紀

渡辺 典子（以上奈良大学文化財学科学生）

内業作業員 中原美佐子 初田 典代 細川 光代

平成5年度

調査主体 南淡町教育委員会 社会教育課

調査体制 事務担当 教 育 長 坂川 一弘
課 長 竹田 功
課長 補佐 黒田 要作
担 当 山見 嘉啓
担 当 村本みゆき
調査担当 調 査 員 坂口 弘貢
調 査 員 定松 佳重 (三原郡町村会)
外業作業員 南淡町シルバー人材センター派遣作業員
内業作業員 中原美佐子 初田 典代 細川 光代
内業補助員 岡部 純子 加藤 亮子 川越 円
中野由紀子 池永 香子 (以上神戸女子大学
遺跡調査会)

平成6・7年度

調査主体 南淡町教育委員会 社会教育課

調査体制 事務担当 教 育 長 川野 四朗
課 長 竹田 功
課長 補佐 稲山 易二
担 当 山見 嘉啓
担 当 村本みゆき (平成6年度のみ)
内業担当 調 査 員 坂口 弘貢
調 査 員 定松 佳重
内業作業員 中原美佐子 初田 典代 細川 光代

2 地理的環境 (図1・2・3)

淡路島は、瀬戸内海東部に位置し、北東～南西に長い地塁状をなして、大阪湾と播磨灘を分ける瀬戸内海最大の島で、面積約579km²、周囲は約174kmである。北は明石海峡、東は紀淡海峡で本州と、西は鳴門海峡で四国と隔てられている。

なお、昭和60年には本四架橋の一部である大鳴門橋が開通し、四国との間は陸続きとなった。平成10年には明石海峡大橋が開通予定となっており、今後淡路島は大きな転換期を迎えようとしている。

淡路島は大きく分けて北東～南西方向の津名山地主体の非常に平野の少ない北部と、西南西～東北東方向の諭鶴羽^{ゆづるは}山地、そして、これらの両山地に挟まれた低地に、三原平野と洲本

平野が存在する南部に分けられる。地質的には、北部の津名山地は領家花崗岩類よりなり、南部の諭鶴羽山地は、白亜系和泉層群により構成されている。

淡路島南部の地形

諭鶴羽山地は（図2）、淡路島南端に位置し、柏原山（569.3m）、諭鶴羽山（608.3m）を中心としたほぼ標高450～500mの平均した高さを保っている。山地の南斜面は、急傾斜をもって紀伊水道へ臨んでいる。これは沖合いの沼島と淡路島の間を中央構造線が走っているため、その断層崖を成しているものと考えられる。一方、山地の北斜面では、ほぼ4本の線状構造をもって高度を階段状に降下させている。（注1）

水系に注目してみると（図3）、諭鶴羽山地では分水界が極端に南に片寄っている。これは、前述の諭鶴羽山地の地形によるもので、特に南斜面では河川が短く、勾配が急なため、深いV字谷を形成している。これに対して北斜面は山地の大部分を集水し、三原平野へは倭文川・成相川・三原川・大日川が西淡町松帆付近で合流し、三原川となって播磨灘へと注いでいる。またこれらの河川は、いずれも山麓から平野に向かって扇状地を形成している。扇状地は開析を受け段丘化している。なお、三原平野の地形構造については、高橋学氏により「志知川沖田南遺跡の地形変化と水田開発」（注2）に詳しく述べられているので参照していただきたい。

淡路島南部の気候

淡路島南部の気候は、全体的に温暖で瀬戸内式の気候を示す。年平均降水量は1,400～1,450mmと全国平均よりやや少ないが、台風・梅雨期には集中豪雨的な傾向をもっている。また河川が急で短いため水害も多い。

年平均気温は16℃、年格差22度と温暖で神戸や徳島に比べて年格差は小さい。特に岩谷遺跡に隣接する地域の「賀集アメダス」によれば年格差15.8度、年平均降水量1,231.5mmとより少ない傾向にある。（注3）

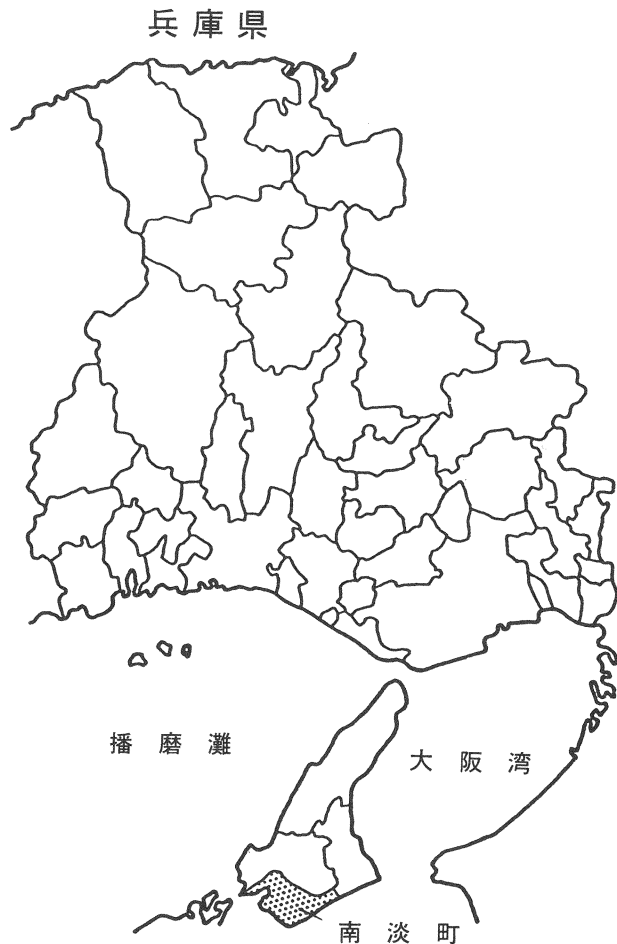


図1 南淡町位置図

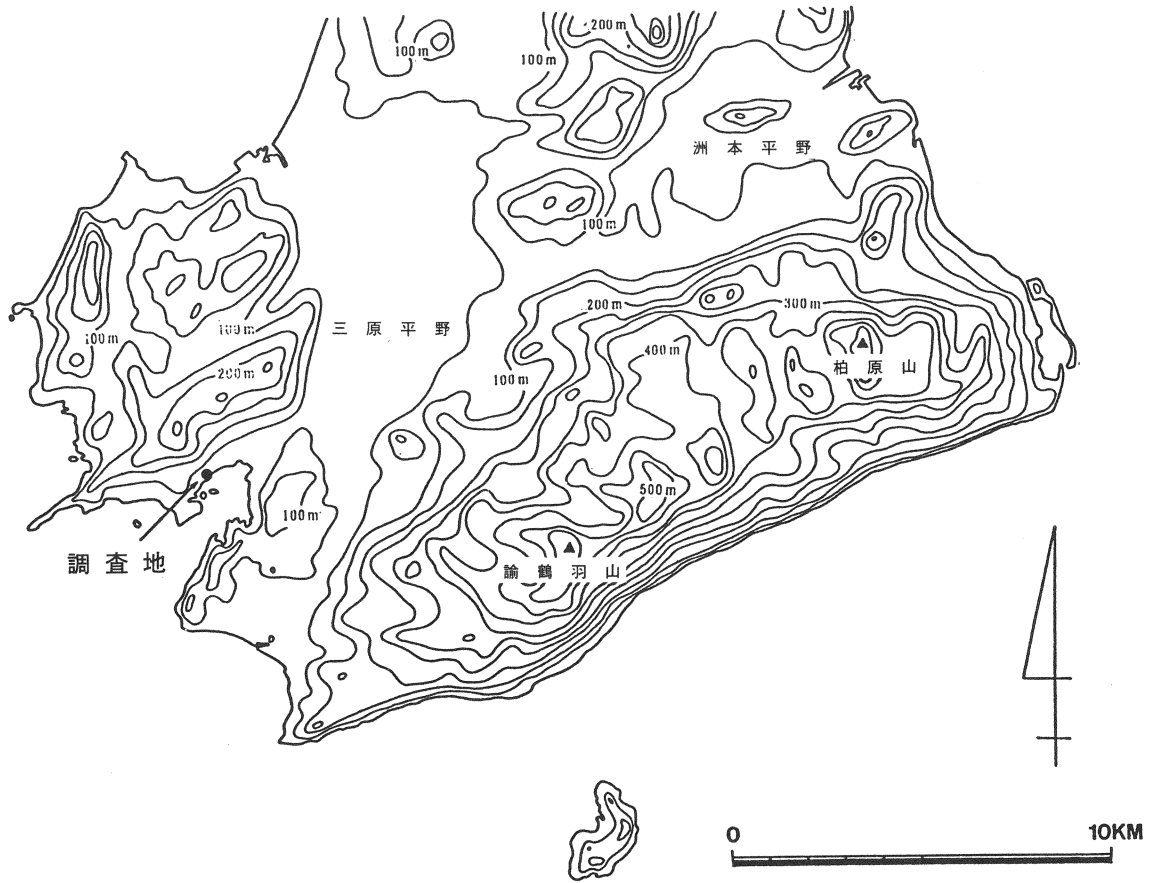


図2 淡路島南部地域埋積切峰面図

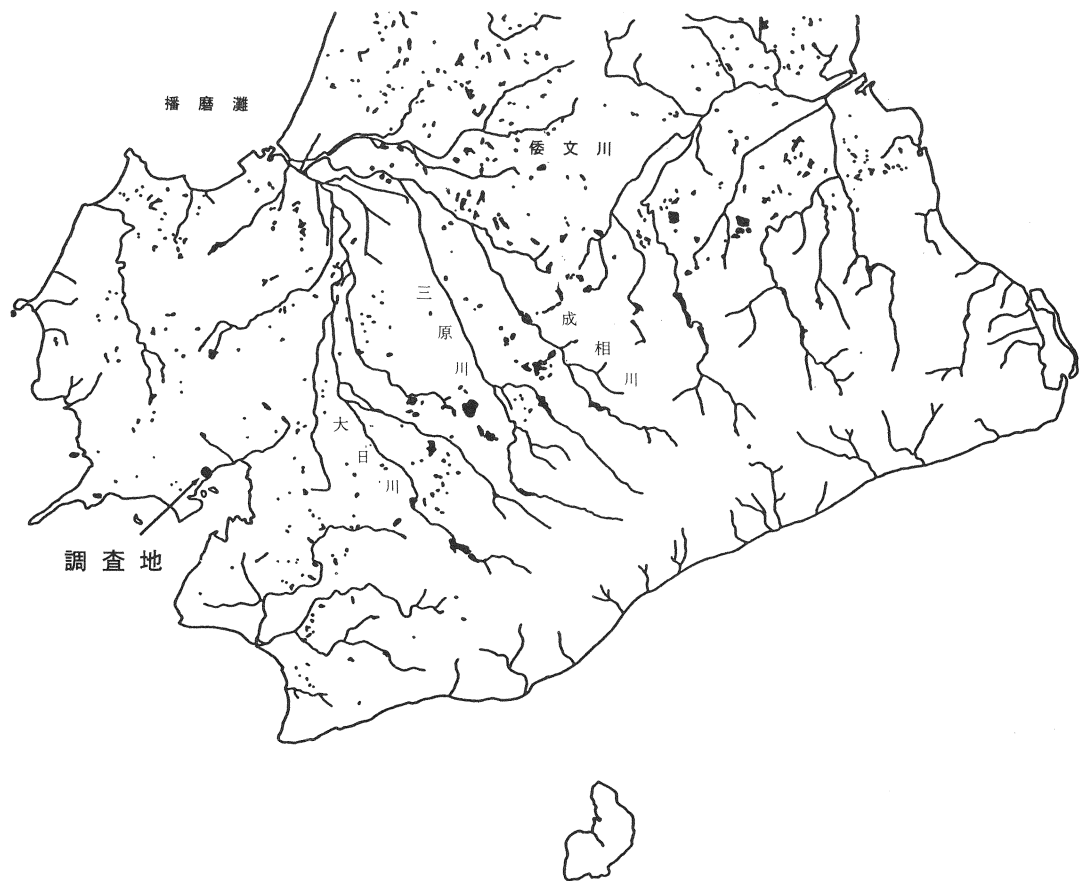


図3 淡路島南部地域水系図

遺跡周辺の地形環境

岩谷遺跡の位置する南淡町福良は、淡路島南西端にあり、鳴門海峡が深く湾入した奥にある良港で古くは古代南海道の駅家に比定され、大鳴門橋が開通するまでは四国鳴門への玄関として栄え、今では鳴門観潮の観光拠点となっている。

この福良湾には、背後の諭鶴羽山系から流下する原田川・築地川・仁尾谷川等の河川によって形成されたと考えられる小規模な平野が存在し、遺跡はこの平野の南西部に位置している。遺跡の層序から第Ⅳ層の灰色砂層がかつての海岸線であると想定され、この層の上面はT. P. 約1.0mである。なお遺物は、この上の第Ⅲ層より見られることから岩谷遺跡はすでに陸化していたようである。

(注1) 田中真吾「淡路島南部地域の地形とその特色」『淡路島南部地域学術調査報告書』1973

(注2) 兵庫県文化協会編『淡路・志知川沖田南遺跡』1987

(注3) 洲本測候所調べ。

3 歴史的環境 (図4)

淡路島内において発掘調査された遺跡は、他地域に比較して非常に少ない。しかし近年の大規模開発に伴って、地元の研究者、兵庫県および各市町教育委員会により、序々にはあるが、資料が蓄積され、淡路島の重要性が再認識されつつある。

ここでは、非常に限定されたものであるが、発掘調査の有無にこだわらず、南淡町を中心に歴史的な環境について触れてみたい。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は、町内はもとより三原郡内においても10カ所あまりを数えるにすぎない。その中であって長原遺跡(14)は、以前よりサヌカイト製の有舌尖頭器を含む石器が多数散布することでよく知られている。平成5年に実施した分布調査により、旧来よりかなり広範囲に遺物は散布することが分かった。採集遺物には、石器やサヌカイト片があり、土器を伴っていないといった特徴があげられる。また奥河内遺跡(19)では、縄文時代早期に位置づけられる山形押型文を施した土器が出土している。いずれの遺跡も具体的な様相はとらえにくいだが、河川の上流域に立地していることが指摘できる。

次の弥生時代になると遺跡数が増加すると共に、確実に集落の営みが始まる。その実体は三原平野を中心に明らかになりつつあり、同平野の南側の太平洋に面する阿万・福良地域においても遺跡が知られるようになってきた。

前者については本庄川流域に、河内(20)・佐古谷(21)の両遺跡、塩屋川流域に初田遺跡(24)、そして北田遺跡(25)が鴨路川流域に見られる。後者には今回報告する岩谷遺跡(1)がある。なお現在のところ町内では、前期まで遡る遺跡は知られていない。

弥生時代の中頃になると、瀬戸内を中心に山地や丘陵上に突如として遺跡が出現し始める。大陸と畿内を結ぶ海上交通の要衝に位置する淡路島にも、その痕跡がみうけられ、津名郡を

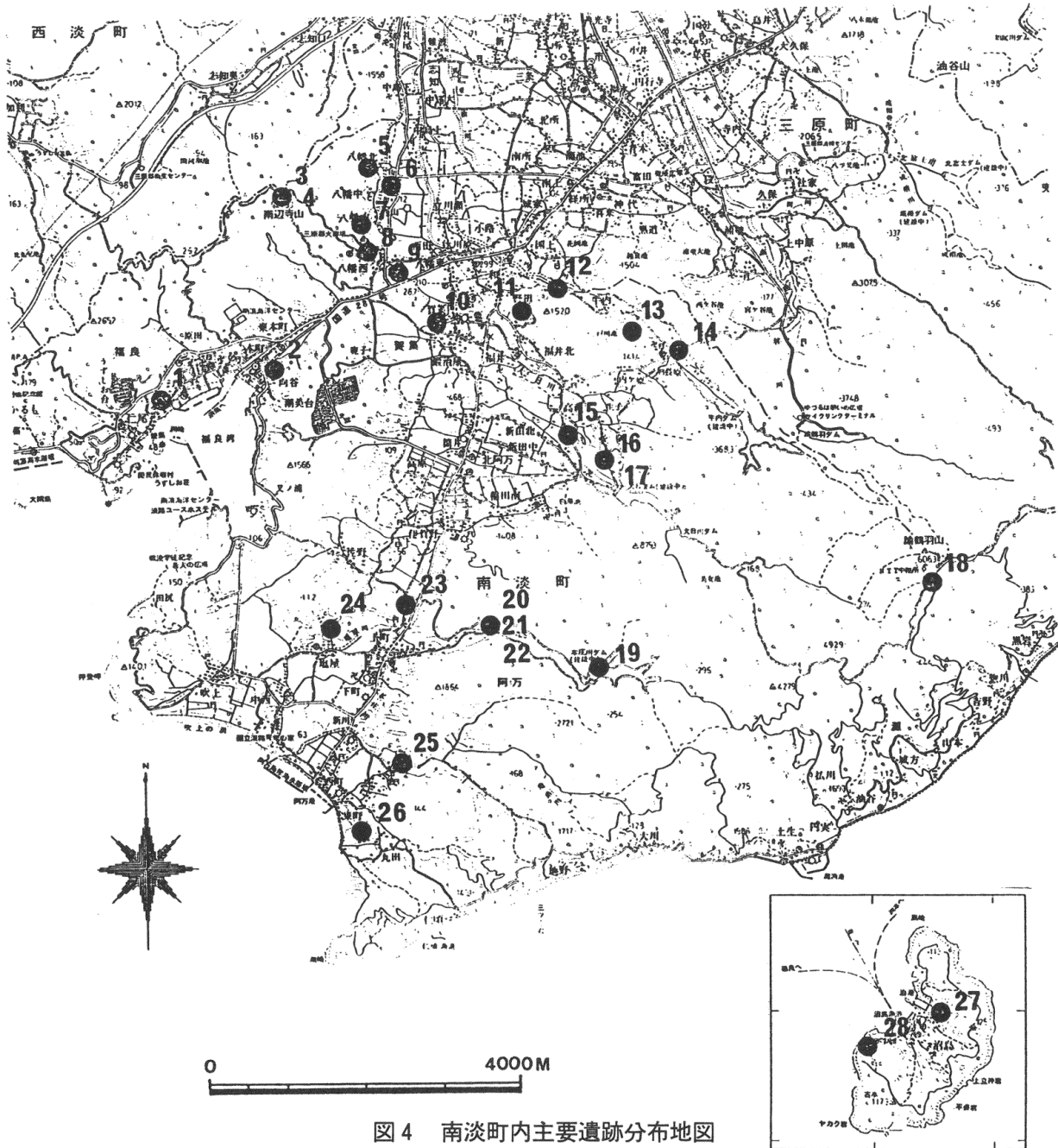


図4 南淡町内主要遺跡分布地図

- | | | |
|--------------------------|----------------------------|---------------------|
| 1. 岩谷遺跡(弥生時代～平安時代) | 2. 玉造遺跡(古墳時代後期～中世) | 3. 西山遺跡(弥生時代) |
| 4. 南辺寺古堂址(平安時代後期) | 5. 西山北古墳(古墳時代) | 6. 石ヶ坪遺跡(平安時代) |
| 7. 西山南古墳(古墳時代) | 8. 護国寺址(奈良時代) | 9. 平松遺跡(弥生時代) |
| 10. 城の腰城址(室町時代後期) | 11. 野田山古墳(古墳時代) | 12. 小山古墳(古墳時代) |
| 13. 戸川池窯址(奈良時代後期) | 14. 長原遺跡(旧石器時代・弥生) | 15. 高萩遺跡(弥生時代) |
| 16. 細田遺跡(弥生時代) | 17. 八斗一遺跡(弥生時代) | 18. 論鶴羽神社遺跡(平安時代後期) |
| 19. 奥河内遺跡(縄文時代早期) | 20. 河内遺跡(弥生時代後期～古墳時代前期・中世) | |
| 21. 佐古谷遺跡(弥生時代後期～古墳時代前期) | 22. 正福寺址(平安～室町時代) | |
| 23. 池の尻遺跡(弥生時代) | 24. 初田遺跡(弥生時代～中世) | 25. 北田遺跡(弥生時代・中世) |
| 26. 丸田古墳(古墳時代) | 27. 沼島古墳(古墳時代) | 28. ノダラの浜遺跡(古墳時代) |

中心にその傾向が強い。これらの遺跡は、中国の文献に記載される「倭国大乱」などといった政治的混乱と結びつけて、軍事的な性格を強く帯びたものと解釈されている。町内においても、立地や出土遺物から見て南辺寺山頂の西山遺跡（3）も同種の遺跡と考えられる。(注1)

他の時代と墓制の特徴をもって設定される古墳時代は、三原平野の縁辺部を中心に古墳が確認されている。この内、現在町内では賀集地域に7基、阿万地域に2基、沼島地域に1基が知られる。(注2)ただ現段階では古墳の規模・内部構造や集落との関係など不明な点が多く、今後の調査課題は多いといえる。

淡路を特徴づける遺跡として製塩遺跡があげられるが、三原郡内においても弥生から古墳時代にかけて土器を使用する塩生産が始まる。福良湾に面する岩谷（1）・玉造（2）両遺跡や淡路島の南沖合にある沼島のノダラの浜遺跡などでは煎熬過程で使用された製塩土器が出土している。それ以後の塩生産に関しては、考古学的に実証は得られていないが、平城宮出土木簡の中に、

「淡□国三原郡阿麻郷戸主〔 〕戸同〔 〕調塩三斗…」

と書かれたものがある。(注3)

さらに『兵庫北関入船納帳』（1445年）によると、兵庫津に入港した船に淡路船が頻りに認められる。その内、三原船の積荷の大半が塩であることが非常に興味深い。(注4)中世に入っても三原地域は、塩を生産し海上交通を積極的に活かして各地との交易を展開していたことをうかがわせる。

飛鳥～奈良時代になると淡路島は、律令制にもとづき南海道に属する「淡路国」として位置づけられた。淡路国は阿万・賀集・神稲・榎列・養宜・幡多・倭文の7郷からなる三原郡と10郷からなる津名郡より構成される。この内、阿万・賀集両郷が現在の南淡町内に比定されている。また両地域には、正方位をとる方面状の地割が、現在の地割として踏襲されているところもあり、地方での律令制を考える上で貴重な資料といえる。

淡路国を総括する国府の位置は、数カ所候補地が挙げられており、文献資料などから現在の三原町市周辺が最も有力視されている。また三原郡衙については現在のところ手がかりがなく不明である。宗教施設の中心である国分寺・国分尼寺は、三原町八木地域に建立された。

これらの施設の需要にともなってか三原平野の山地や丘陵裾部には、須恵器や瓦の窯が築かれる。賀集の戸川池窯址（13）からは、窯片と奈良時代後期の須恵器が採集されている。

畿内と四国を結ぶ、古代官道「南海道」は、現在の洲本市由良～三原町～南淡町福良に至るルートが想定されており、この官道沿いには、幾つかの駅家が設置されたようである。

平安時代後期には、南辺寺古堂址（4）、正福寺址（22）、諭鶴羽神社（18）といった遺跡が営まれる。これらの遺跡の採集遺物には瓦があり寺院址と考えられている。この時期の寺院は山地の頂上や山裾といった立地上の共通点が見られ、南辺寺古堂址（4）では、国分寺と同範の軒丸・軒平瓦がある。(注5)また郡内にはこの頃、阿万庄や賀集庄など幾つかの荘園が成立する。先の寺院址とは別に石ヶ坪遺跡（6）では、平安時代の遺物が比較的まとまって出土しており、周辺に集落が存在することを予想させる。また北田遺跡（25）では平安から室町時代にかけての四面に庇を持つ掘立柱建物址などが確認されている。

以上、南淡町内を中心に歴史的な環境について簡単ではあるが述べてみた。現在までのところ町内はもちろん郡内においても、考古学的な調査が十分実施されているとはいえ、決して満足いく内容とはいえない。また、海上交通の要衝に位置する淡路島が持つ特殊な地理的要因により、周辺地域との対比も重要な作業となってくるであろう。今後の資料増加を待って補足および訂正を行っていききたい。

(注1) 淡路文化資料館編『弥馬台国の時代と淡路島』 1987

(注2) 淡路文化資料館編『淡路島の古墳時代』 1993

(注3) 三原郡史編纂委員会編『三原郡史』 1979

(注4) 武田信一「兵庫北関入船納帳の淡路船について」『歴史と神戸』第26巻4号 1987

(注5) 岡本稔「第二淡路 二国分寺(二)」『新修国分寺の研究第五卷上南海道』 1987

その他参考文献

兵庫県教育委員会編『特別地域埋蔵文化財 遺跡分布地図及び地名表』 1972

沼島遺跡・遺物分布調査団『考古学上からみた沼島』 1974

II 調査結果

1 層序 (図5・6)

調査は、コンクリート擁護壁が設置される一部と周辺の拡張部を合せた64㎡を対象に行なった。調査区の幅が約4m、長さが約16mのトレンチを谷の出入り口に平行して設定した格好となっている。

ここでは、調査区の南壁(海側)の土層堆積をしてみる。基本的には、上から整地層(I層・1~2層)、黄色~灰色系粘質土層(II層・4~7層)、黒色系砂質土層(III層・11~12層)、灰色系砂層(IV層・13~14層)の4層に大まかに分層できる。

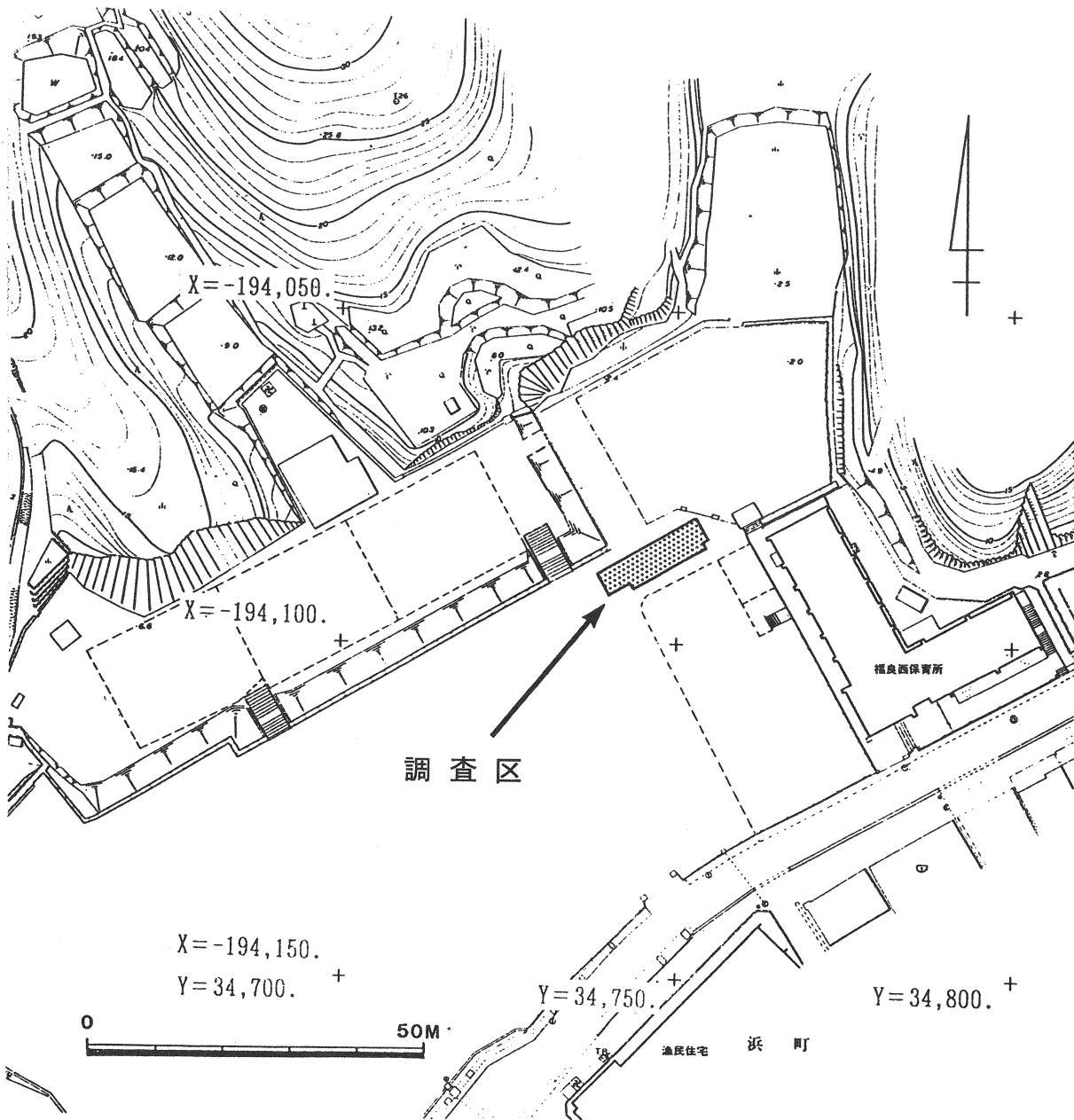


図5 調査区設定図

さらに各土層を細かく見ると、コンクリート・瓦といった産業廃棄物を含む現代の整地層が約70cmの厚さでほぼ均一に堆積する。一方当該地のベースとなる砂層は西方向つまり山側にむかって、序々に高度を増すため、粘質土層・砂質土層ともにその厚さが薄くなる。また粘質土の最下層は、遺物などの混入物を多く含んだ汚れた土壌であり、調査区の西側でその傾向が強い。この粘質・砂質土層と砂層の上層に遺物が含まれており、砂質土層からの出土が非常に顕著であった。

その遺物はいずれも細片化しているが、砂質土層には弥生土器、粘質土層には律令期以降の土器が多いという傾向にある。しかし砂質土層にも、わずかではあるが須恵器や黒色土器などが見られることから、かなり年代幅を持った包含層といえる。

砂層は、調査地の標高などから見て、かつての海岸線であったと想像され、その後沖積作用や埋立てが進み、現在にいたっている。またこの海岸も荒波が常に押し寄せるような場所ではなく、穏やかな砂浜状をなしていたと思われる。

本調査において、この砂層の上に堆積する砂質土層からは、非常に多くの弥生土器が出土したが、遺構については顕著なものは確認しえなかった。しかし、遺物の出土状況や地形から推測すると、弥生時代には、調査地北側のさらに谷の奥まった場所を生活の中心としていたと考えられる。

2 遺構 (図6～8)

本調査により確認できた遺構面は、近・現代を含めて3面(A～C面)ある。しかし、調査面積の関係などからその性格や年代を積極的に示す資料が非常に少ない。ここでは、確認できた遺構を時期的に新しいものから見ていくことにする。

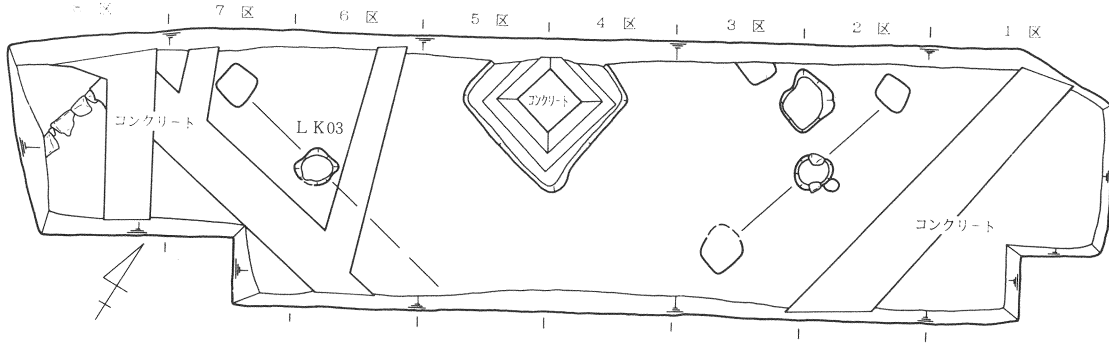
A面

整地層を除去した段階、つまり粘質土層上面で調査区のいたるところでコンクリート製の排水溝などが露出し始めた。このコンクリート製の施設に一部平行して、同一面で平面形が隅丸方形をなし、直径約50cmを測る土坑などを確認した。これらの土坑は、中央に人頭大の平な石を据えて、その周りや上方にはそれより小さめの石が密に詰まっていた。その内のLK03から近世以降に属すると思われる燻し瓦片が出土している。これらの施設は旧日本軍の兵舎もしくは旧福良中学校に伴うものであると考えられる。

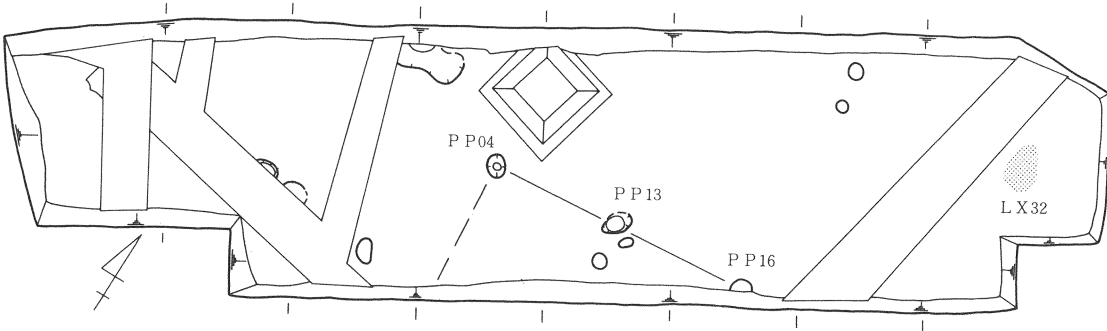
B面

暗灰色砂質土層を上面とする遺構には、顕著ではないが、調査区のほぼ全面で直径20cmあまりの小穴や、土坑状の遺構が確認できた。その内調査区中央において、最低南北1間、東西2間以上の建物址が成立するものと思われる。柱穴と考えられる遺構の大きさは、直径約20～25cmの円形で検出面より30cmあまりの深さを有する。また各遺構の間隔は2.1mあまりを測る。遺物はPP13より土錘(16)、PP16より土師器甕の体部片(117)がそれぞれ埋土中より出土している。

A面



B面



C面

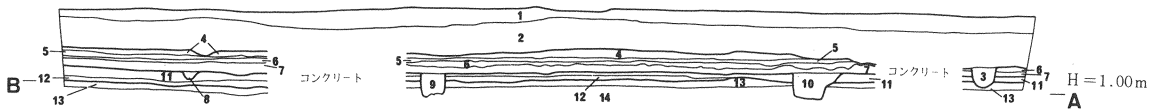
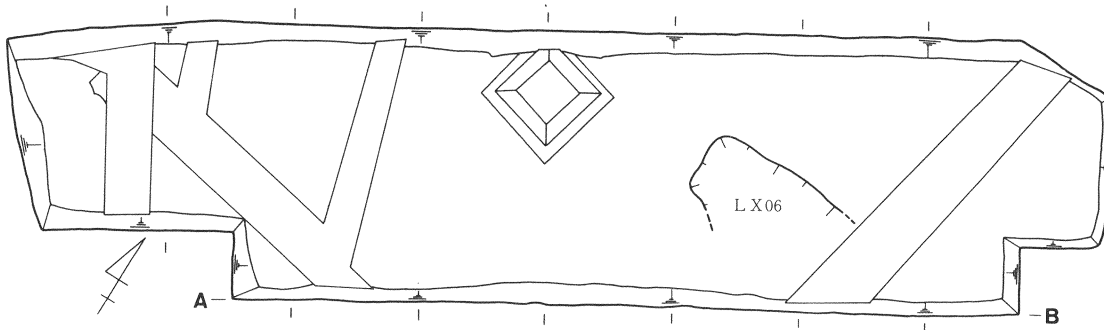


図6 調査区平面図および南壁層序図

- | | | |
|----------------------|-------------|-------------------|
| 1 真砂土 | } 整地層(I層) | 8 暗灰色粘砂質土 |
| 2 真砂土(コンクリート, 瓦など含む) | | 9 灰褐色土~黒灰黄色粘土 |
| 3 粘質土+砂質土+礫混茶色土 | } 粘質土層(II層) | 10 黒灰色粘砂質土 |
| 4 灰色粘質土(遺物わずかに含む) | | 11 暗灰色砂質土(遺物多く含む) |
| 5 帯黄灰色粘質土(遺物わずかに含む) | | 12 黒色砂質土(遺物多く含む) |
| 6 灰色粘質土(遺物わずかに含む) | | 13 灰茶色砂(遺物わずかに含む) |
| 7 橙灰色粘質土(遺物多く含む) | | 14 灰色砂(ベース) |
| | | } 砂質土層(III層) |
| | | } 砂層(IV層) |

また調査区の東隅で拳大以下の石が50cmの範囲で集中する箇所が認められた。(LX32) これらの石の上端は高さ的にほぼ一定し、一方所に密集する。しかしその大きさ・配置などに関する規則性や二次的な表面変化は見られなかった。これらの石のすぐ下から須恵器(127)が出土している。

C面

調査区のほぼ中央で、灰色砂をベースとして深さ約8cmの浅い落ちこみを確認した。(LX06) その落ちこみの中やその周辺には東西2m、南北1.5mの範囲で約20cm以下の自然石が集

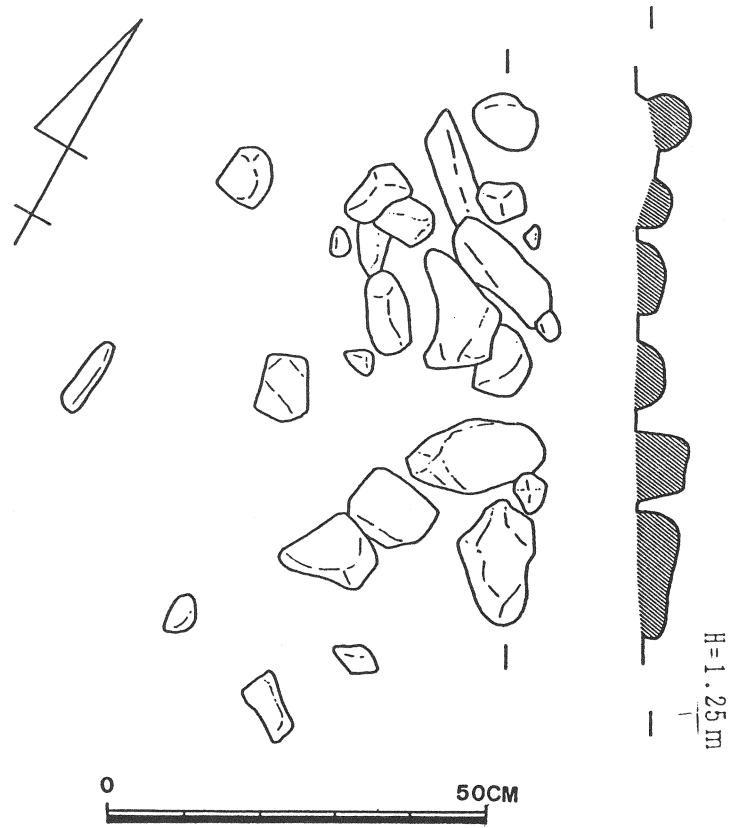


図7 LX32

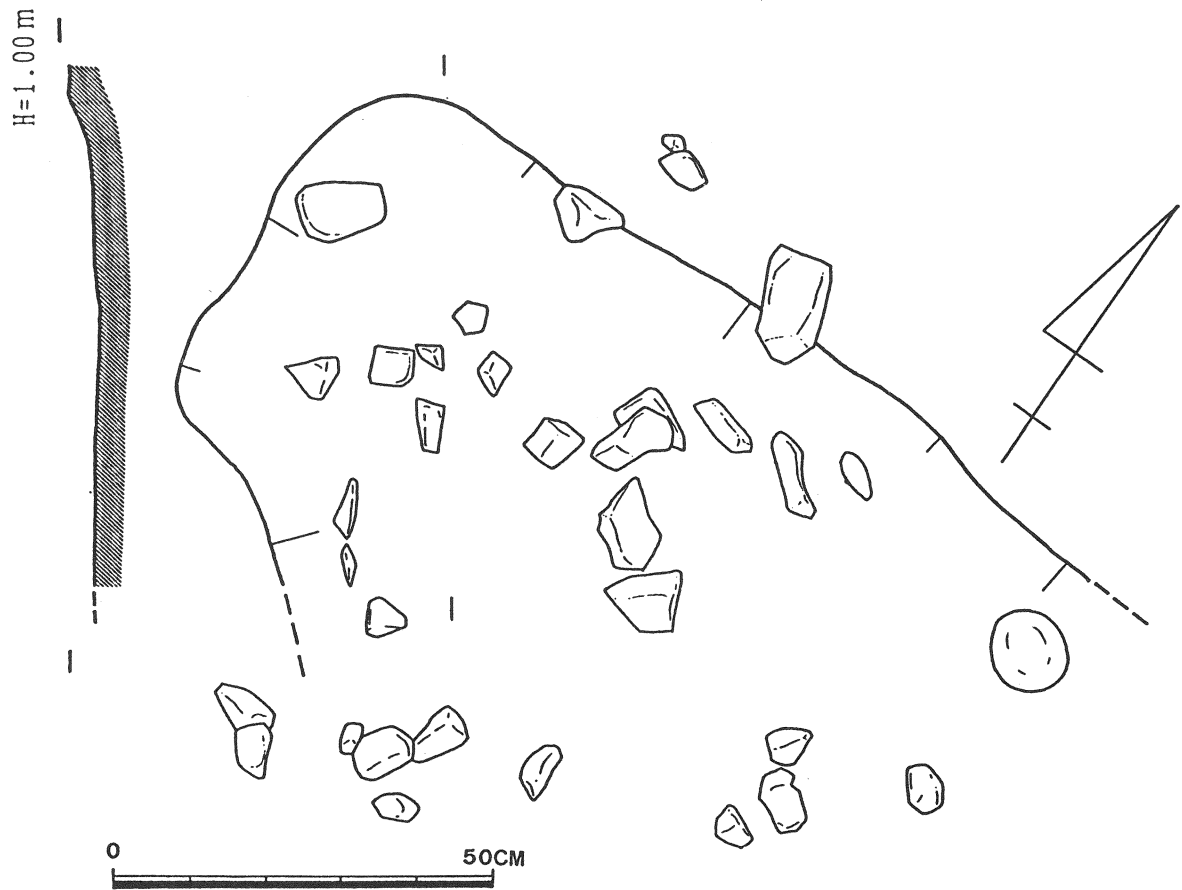


図8 LX06

中する。これは先の石の集中とはやや異なり石も大きく、散在する格好となっている。しかし、それぞれの石の表面的な二次的変化は認められない。遺物は落ちこみ内や石の隙間から細片化した弥生土器（70・88）やサヌカイト片が出土している。

Ⅲ 出土遺物

1 弥生土器（図版 1～5・16～20）

岩谷遺跡の調査では、調査面積（64㎡）から考えると、非常に多いコンテナ22箱分の遺物が出土した。その多くは、遺物包含層から出土した弥生土器で占められている。

遺物包含層は大別すると、1）粘質土層、2）砂質土層、3）砂層と3区分でき、それぞれ遺物を含有していたが、2）砂質土層からの出土量が顕著であった。以下、器種別に述べていくことにする。

甕（1～16）

口径15cmと20cmに大別でき、その形態は屈曲が明瞭な「く」の字形の口頸部をもつものがほとんどである。

口縁端部は外側に面をなし、上方にナデ調整により肥厚し、端面には1～3条の浅い凹線を施す。口縁端部が面をもたずに終わるものはわずかであり、そのうち16は頸部に指頭圧痕を顕著に残し、外面タタキ目調整とやや他の土器より時代が新しいようである。

砂質土層出土の甕はほとんどが内外面共にナデ調整であるが、砂層出土は外面ハケ目調整を施している。

高杯（杯部）（17～26）

口径20cm以上がほとんどであるが小型（口径16cm）もある。口縁部はほぼ直角に立ち上がり、上方外側に面をなす。外面に粘土継ぎ足しによる明瞭な稜を持つ。外面に凹線文を施す杯部（17）もあるが1点のみである。24は口縁部がほぼ水平に開き、口縁端部外面に2条の凹線を施す。他の杯部の調整が内外面共にナデ調整であるのに対し、これはヘラ削り後ナデ調整を行っている。

高杯（脚部）（36～48）

底径10cmに満たないものと13cm前後のものに大別できるがその形態はすべてが「ハ」の字形に開く裾部で、端部が面をなし上方に肥厚している。ほとんどが円孔を施しており、内面ヘラ削り、外面ナデ調整である。

45は底径9.5cmと小型であり、器壁は他より薄く、裾端部は面をなすが上方に肥厚しないなど他の脚部と異なる形態をしている。47は柱状部のみの残存であるが、柱状部と裾部の境付近に7条の凹線文を施し、内面は柱状部ヘラ削り、裾部指頭圧痕が顕著である。

高杯は杯部・脚部ともに端部のみの出土であるため、杯底部が円板充填であるか粘土充填であるかは不明である。

その他の脚部（33～35・49～54）

33・34は台付壺、49～54は器台の脚部と思われる。34は円錐形で浅い凹線文を1条ずつ2段に巡らし、それと重なるように2段の円孔を施す。5穴残存しておりそのうち2穴は未貫通である。35は高杯脚部と思われるが岩谷高杯の形態と異なるためここに分類した。直線的に開く円錐形であり、裾端部は丸く終わる。裾部に円孔2穴残存し、8穴になる可能性がある。54は厚手の大型であり、裾部内側に粘土折り返し痕が残る。

器台（30～31）

31は堦を伏せたように丸みを帯びた杯部である。口縁端部は上方に面をなし、口縁外面に凹線文を施す。

無頸壺・鉢（55～58）

55は台付無頸壺の壺部であり、口縁下と体部屈曲部に1条の凹線文を巡らす。56は口径7.9cmと小型であり、口縁やや下に円孔をもつ。57・58は台付鉢の口縁部であり、段状口縁端面に櫛描列点文、その下に簾状文が施され、58は円孔を穿つ。

壺（59～71）

広口直口壺（59）、広口壺（60～68）、頸部（69・70）、体部（71）が出土した。

59は口縁端部が内側に肥厚し、外側に刻み目文を施す。

広口壺は口径15cmと20cmに大別でき、口縁部はなだらかに外反し、口縁端部は外側に面をなし、2～4条の凹線文を端面に施す。61は3条の凹線文を施した後、2本の波状文を描く。64～66はこの端面に2段の竹管文を、67は口縁内面に格子条文を施す。68の口縁はラッパ状に開き、口縁内面には連続刺突文を施す。

頸部70は、7条の太い凹線文を施しており、直線的な頸部より強く屈曲して体部へ広がる。内面には指頭圧痕が顕著に残る。

体部71は体部最大径12.2cmと小型の壺もしくは水差しである。体部は屈曲が強く、算盤玉形を呈する。屈曲部内面には指ナデ痕が顕著であり、外面には刺突文が2段施される。

その他（72～75）

75は器壁内面がわずかに残っており、その湾曲から水差しの把手と思われる。

底部（76～90）

いずれも底部は明瞭に残っているが、90のみ外面にタタキ調整を行い、底部もほとんど退化している。

底径5cm前後と9cm前後のものに大別できる。88は故意か偶然かわからないが中に大きな礫が1つ入った正位置の状態出土した。

体部 (91~102)

91はLX03からの出土である。92~95は外面に櫛描の直線文、波状文、斜格子文、簾状文が施されている。特に93は大型の壺となる可能性がある。97は太目のタタキのうえに櫛描列点文が施されている。100は刺突文と円孔がみられる。102は小型甕であり、底部と体部の境付近まで細身の連続螺旋タタキが施されており、底部は突出すると思われる。1様式新しいようである。

2 製塩土器 (図版 6・21・22)

出土した製塩土器は、個体数にして10数片ある。いずれも細片化した上に摩滅しており、遺存状況は良好とはいえない。製塩土器の量が遺物の全出土総量の中で占める割合は非常に低いが、他の土器片の中に二次焼成を受けて変色している物も若干ではあるが認められる。

ここで紹介する製塩土器は、煎熬過程で使用されたと考えられている底部の形態が脚台を有するものと焼塩過程で使用されたと考えられている丸底のものである。ただし全体の器形を復元できる遺物は含まれていなかった。

遺物の出土地区は、調査区内において特に顕著な傾向はないが、脚台を有するものは砂質土からの出土が約半数を占める。

103~109は、底部の直径が約4cmをはかる。先の4者は底部内面には0.5~1cmあまりの凹みを有するが、108、109の底部外面は平滑な作りである。また107、109は脚台端部の亀裂や反り返りといった現象が見られる。これは、おそらく体部製作時に上からの圧力により生じたものと思われる。さらに107は体部と底部の境界にわずかな接合の跡が認められ、二段階に分けて製作されたことが観察できる。

110は底部の直径・器壁の厚さから見て、他の製塩土器に比べてやや大型である。また体部外面にタタキ目がのこり、内面はナデ調整が施される。

111は底部が破損しているため、正確な直径は計測不可能である。110同様に体部外面に荒いタタキ目が施され、他のものに比較して二次的加熱が著しく、外面が黒色となっている。

112・113は非常に小さな断片的な資料であるが、底部の形態が丸底となる体部の一部と考えられる。内面には細かな布目痕が残り、器壁の厚さが112は0.7cm、113は1cmである。体部内面に布目痕を持つ製塩土器が出土した遺跡は、島内では西淡町所在の谷町筋遺跡(注1)と^{あとやま}後山遺跡がある。

(注1) 兵庫県教育委員会編『谷町筋遺跡』 1990

3 その他の土器 (図版 6・7・22)

これまで紹介してきた土器の他に須恵器・土師器・黒色土器などがある。ここではそれぞれについて図化し説明する。

114・115は黒色土器の底部であり、内面のみが黒色となっている。いずれも断面が逆三角

形の高台がついている。

116は土師器皿と思われる口縁部である。口縁端部がわずかに外反し、内面には一条の浅い凹みが認められる。

117は土師器甕体部の上半部と思われる。外面には荒い縦方向のハケ調整が施され、内面には煮たきを使用したためか黒い付着物が観察できる。

118～122はいずれも須恵器の坏身である。121・122は比較的低い高台が底部の端についているのに対して、118～120は高台がつかず、底部外面にヘラ切りの成形痕が残るものがある。

123～125は高台がついた須恵器塊の底部と思われる。いずれも比較的高い高台がついており、123・124の高台は「ハ」の字状となるのに対して125の高台は、ほぼ垂直方向についている。

126は須恵器の底部である。他の須恵器と比較して器壁が厚く、器形としては壺が考えられる。

127・128は須恵器の坏蓋である。127はLX32（集石）のすぐ下からの出土である。

129は須恵器の壺もしくは甕の口縁部で、端部を上下にわずかに拡張した特徴を有する。

4 石器・石製品（図版8～10・23～25）

石器は形態が知られるものは43点出土した。ここでは佐原真氏の分類法に従う。内訳は凹基式1点、凸基無茎式2点、凸基有茎式34点、石錐5点、打製石包丁1点である。

凹基式（1）

片方の逆刺がわずかに欠損しているがほぼ完形。長さ1.65cm、幅1.5cmと小型である。片面の抉りは一度の打点による。

凸基無茎式（2～3）

2点とも長さは3cmほどである。2は両面に主要剥離面を持ち、大きい剥離を加えてわずかであるが茎部と鏃身を区別している。側辺には鋸歯状剥離が施される。石材はサヌカイトであるがこの1点だけが二上山産と思われる石材である。3は厚さ0.62cmであり断面がほぼ円形にちかく、鏃が両面に明瞭にある。逆刺と思われる突起がわずかに認められる。

凸基有茎式（4～37）

34点のうち6点（32～37）は先端部のみであるがその形態、土器実年代よりここに分類した。小型（長さ3cm以内）では逆刺が角をなすもの（Ⅰ類）となさないもの（Ⅱ類）とに、また、大型（長さ3cm以上）では逆刺が角をなすもの（Ⅲ類）となさないもの（Ⅳ類）、柳葉型のもの（Ⅴ類）、幅が細いもの（Ⅵ類）とに分類できる。

Ⅰ類——9点（4～12）。長さ3cm前後。4～9は側辺が直線的にのび、8は長さ2.05cmと最小である。10は側辺がやや外湾する。11は鏃身が正三角形で逆刺が大きい。12は逆刺から側辺が内湾し、非常に細身の形態である。

Ⅱ類—— 1点 (13)。逆刺が角をなさず円くなだらかで、茎部の抉りは不明瞭である。

Ⅲ類—— 15点。幅が広いもの (14~23) と狭いもの (24~28) に大別できる。14は茎部を欠損しているがほぼ完形、抉りは他よりも浅く、側辺はやや外湾する。15~17は厚手であり、作りが雑な感がある。24・25は側辺が直線的にのび薄手であり、24は茎部が欠損しているが全体的にきゃしゃな形態である。側辺が大きく内湾し逆刺から茎部にかけても内湾する27はⅠ類12と似た形態を持つ。

Ⅳ類—— 1点 (29)。側辺が外湾し、茎部は太めである。成形失敗なのか厚さが均一でない。

Ⅴ類—— 1点 (30)。先端部は欠損している。茎部の作り出しは一度の大きな剥離によるものと剥離の方向を変えずに幅、深さ、回数等を調節するものを併用している。復元すれば5 cmは超える大型になる。

Ⅵ類—— 1点 (31)。長さに比べて幅が非常に細い。片面に剥離面をわずかに残す。

石錐 (38~42)

頭部と細長い錐部を作り出す形態であるが、頭部と錐部が明瞭に区別されていないもの(Ⅰ類)とされているもの(Ⅱ類)に分類できる。

Ⅰ類—— 3点 (38~40)。38は両面に主要剥離面を持ち、わずかであるが頭部を調整している。3点とも明確な使用痕跡は認められない。

Ⅱ類—— 2点 (41~42)。41は両面に主要剥離面を持ち、錐部、錐部と頭部の境付近まで調整が入る。

石包丁 (43)

完形ではないが打製石包丁が1点出土した。楕円形で抉りはわずかであるが痕跡を留め、主要剥離面を持つ。

その他 (44~59)

ここでは完成品ではないが、2次調整を確認できるものを一括した。

44~49は石鏃の未完成品とも判断できる剥片である。48は完成すると7 cmにはなると思われる大型品である。49はほぼ完形に近いが茎部の作り出しがあまいことから、未完成品とした。

50・51はやや小振りであるが、52~56は6 g以上の大塊である。

石製品 (60~62)

砂岩系の石は多く出土したが、その中で人為的な痕跡を残すものを取り出した。

60は三方が平坦面であり、なめらかになっていることから、やや小振りではあるが砥石と思われる。61は結晶片岩で周囲が著しく摩耗しており、性格不明である。62は砂岩系で打痕と思われる小さい凹みがあり、サヌカイトが多量に出土していることから石器製作工具と思われる。重量は955 gである。

5 土錘 (図版11・25)

土錘は全部で16点出土した。管状土錘 6点、棒状土錘 6点、有溝土錘 4点である。

管状土錘 (1～6)

大型品と小型品に分けられ、大型品 (1～3) は重量約170 g、最大幅 5 cm前後とほぼ一定であるのに対し、小型品 (4～6) は重量 3～9 g、最大幅0.9～1.5cmとばらつきがある。

2 は胎土中に0.2～1.0cmの礫を多く含有し、また植物の茎の痕跡があり故意の混入か自然かは不明である。

棒状土錘 (7～12)

大型品と小型品に分けられ、大型品 (7・8) は完形ではないが復元長約10cm、重量30 g以上になると思われる。小型品 (9～12) は11・12が完形であり、長さ6.8cm、重量17～21 gである。両端部は穿孔のため、扁平化している (12)。

有溝土錘 (13～16)

ほぼ均一の形態をしており、長さ 7 cm、最大幅 4 cm前後となる。焼成はどれも良いとはいえず、特に14は不良で軟質である。

IV ま と め

1 弥生土器

岩谷遺跡の調査で出土した弥生土器は、完形品はないが大きな破片が比較的多く、器表面の観察もやや剥離がみられるがさほど困難ではない。

器種としては甕、壺、高杯、鉢と多種出土した。なかでも甕や壺、高杯杯部のほとんどに凹線文が施されており、第IV様式後半の土器である。

岩谷遺跡出土土器の特徴は器種別にみると、

甕——頸部強く「く」の字に屈曲し、口縁端部上方肥厚、端面に数条の凹線文が施される。

壺——広口壺が多く、凹線文、竹管文、波状文と装飾に富む。

高杯——口縁端部はすべて面をなし、杯屈曲部に明瞭な稜をもつ。脚部は裾が大きく「ハ」の字に開き、裾端部上方に肥厚し、面をなす。ほとんどの脚部に円孔が穿たれている。

となる。特に高杯が木椀型高杯や円形浮文等で加飾されたものや淡路型器台等、同時代の遺跡の一般的な構成ではなく、この形態のみで構成されているのは島内の他遺跡ではみられず、岩谷遺跡の特徴と言える。また、島内で出土数が少ない簾状文をもつ台付鉢の口縁部も数点出土し、岩谷遺跡が重要な位置にあったことは間違いのないであろう。

北淡路西部は備讃瀬戸・播磨、東部は摂津、洲本は河内・紀伊、南淡路が阿波・讃岐地方の影響を受けていることは、島内の遺跡から出土する土器により明確である。良好の湾である福良湾に面する岩谷遺跡は阿波・讃岐地方の影響範囲であるが、高杯杯部の形態は山陽地方の影響が認められ、それは淡路島が東部瀬戸内において、明石海峡・友ヶ島水道・鳴門海峡を形成する上で軍事・経済面で重要な位置にあったことが大きな役割を果たしている。

参考文献

兵庫県教育委員会編『寺中遺跡』 1988

兵庫県教育委員会編『森遺跡』 1988

財団法人 兵庫県文化協会編『大森谷遺跡』 1985

2 石器

1は非常に薄手の小型品であり、土器年代よりやや先行すると思われる。2、3は同種としたが詳細を観ると機能部、丁寧度の相違が著しく、石材が異なることから2は製品として搬入されたか、もしくは、サヌカイト剥片も多量に出土しており二上山系の原石とともに作り手の移動があったとも推測できるが、出土数が少ないため断定はできない。

31は非常に細身であり、現在淡路島島内ではまだ出土をみない形態である。良好の漁場である鳴門海峡を眼前にひかえる本遺跡を考慮すると、漁撈具のヤスとの見方ができる。しかし、釣針・モリ・ヤス等骨角製品の出土が全くなく1点しかなく報告例もないため、断定は困難でありこれからの発掘調査に期待したい。

12、27は凸基有茎式石鏃のなかでもやや特異な形態を持ち、側辺、茎ともに内湾し菱形を呈する。31同様にこの地域の特徴と言えるのではないであろうか。

44～50は未完成品であるが石鏃と判断できるところまで調整が行われている。

出土石鏃総数37点のうち、凹基無茎式1点、凸基無茎式2点、凸基有茎式34点と凸基有茎式が大部分を占め、また、特に18・20は復元長は5 cmを超えるものとなり、大形化を認めることができる。

製品は主要剥離面をほとんど残さないまで調整が加えられており、素材の変形度が大きいことがうかがえ、非常に小さなサヌカイト剥片が多かったのもそのためであろう。

石鏃及び未製品はすべて讃岐産と思われるサヌカイトであるが、そのうち製品では1点、剥片内にも二上山産のサヌカイトの存在が肉眼観察によって判明している。淡路島島内でもサヌカイトを産出するが少量で質もあまり良いとはいえず、むしろ讃岐からの原材獲得のほうが効率がよい。ここに四国～淡路間の石の流通が存在するわけであるが、二上山系のサヌカイトも出土していることから大和～淡路間にも流通があったことが想定できる。しかし、出土遺物内に大和・河内系の土器はみられないため、岩谷遺跡ではサヌカイト原石のみを搬入し、二上山サヌカイトを特別視しているかのようである。

参考文献

- 大阪府埋蔵文化財センター編『池上遺跡』第3分冊の1・2 1979
平井 勝『弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社 1991
松本武彦「弥生時代の石器武器の発達と地域性—とくに打製石器について—」『考古学研究』140
兵庫県教育委員会編『森遺跡』1988
詫間町文化財保護委員会『紫雲出』1986
兵庫県教育委員会編『七日遺跡（I）第2分冊』1990

3 土錘

土錘に関する分類法は和田晴吾氏による分類に基づいて行うことにする。以下混乱を避けるため、和田分類によるものはアルファベットで、岩谷遺跡内の分類はローマ数字で表記する。(図9)

本遺跡からは管状土錘、棒状土錘、有溝土錘が出土している。これら岩谷遺跡出土の土錘を土錘として最も重要な要素である重量でみていくと、

管状土錘Ⅰ（a）は大型が出土、

管状土錘Ⅱ（b）は小型が出土、

棒状土錘Ⅲは中型（半折れ状態のため、中の大型か小型か不明であるが、おそらく中の小型に分類できるものと思われる）が出土、

棒状土錘Ⅳ（a）は小型（中の小型の可能性もある）が出土、

有溝土錘Ⅴ（b）は大型が出土、となる。棒状土錘Ⅲは棒状土錘（a）の大型品であるが和田分類では登場しない形態のものであり、淡路島内では現在本遺跡でのみ確認されている。棒状土錘が別名『瀬戸内型土錘』

と言われているとおり、瀬戸内海独自の発展を遂げた形態から岩谷遺跡内でさらに大型へと分化している。棒状土錘は網を带状に敷設し、そこを通過した魚を網目に刺して捕獲する刺網漁用という説があるが、岩谷遺跡は棒状土錘を用いる漁法に対して他ではみられない技術の発展を成している。

参考文献

和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』 1982

真鍋篤行「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第7号 1994

真鍋篤行「弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第8号 1995

4 製塩土器

岩谷遺跡を特徴づける遺物として、点数は少ないものの製塩土器をあげることができる。ここでは、本遺跡から出土した製塩土器を改めて見直し、本報告書のまとめとしたい。

本遺跡から出土した製塩土器は、脚台を有するものと、体部の内面に布目を有する丸底になるものがある。製塩土器はいずれも遺物包含層からの出土であり、弥生土器や須恵器など、かなり年代幅を持った土器と同時に出土している。

これまでの調査成果から脚台を有するものは、弥生時代中期後半～古墳時代前期頃に、内面に布目痕を残す底部が丸底となるものは、律令期頃にそれぞれ位置づけられている。さらに西日本における土器製塩の開始は、現在の岡山県付近を中心とする備讃瀬戸地域に求められ、その年代については弥生時代中期後半頃とされている。それらの製塩土器の特徴は、脚台部が長く、体～脚台部外面にはへら削り調整が認められる。この土器については、弥生時

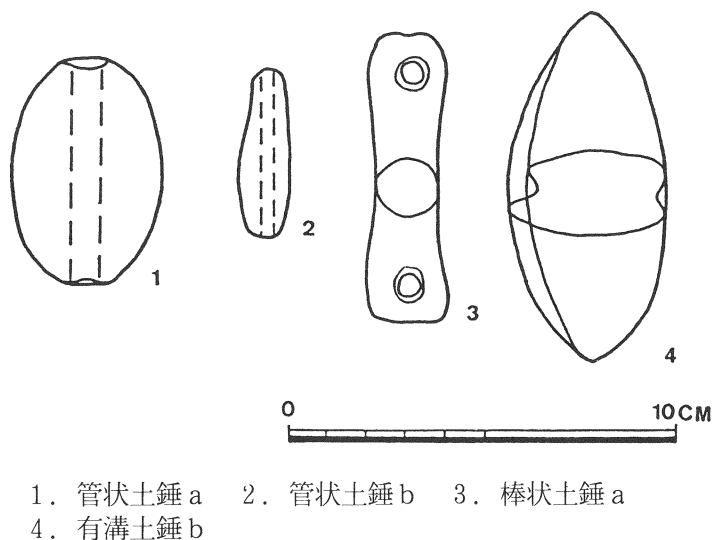


図9 和田分類による土錘分類図

代中期後半頃の鉢型土器と同じ技法で製作されていることが指摘されている。

岩谷遺跡から出土した弥生土器は、外面に凹線文を施しており、弥生時代の中でも中期後半頃の特徴を有したものが大半を占めているが、体部上半や底部付近に右上がりのタタキ痕を残し、底部の形態が平底でなく、丸底に近いものがわずかであるが存在する（16・90）。また製塩土器の特徴については外面にヘラ削り調整は見られず、脚台部の外面が指押さえや、体部外面に一部タタキ目が残るものもある（110、111）。これらのことからみて、岩谷遺跡から出土した脚台を有する製塩土器は、現段階では弥生時代中期後半頃以降の資料といえよう。

最後になったが、本報告書をまとめるにあたって、特に淡路島内の諸先輩方には、終始親切かつ適切な指導および助言を頂いた。紙上を借りて改めて厚くお礼を述べるとともに、本書をはじめ出土資料が、南淡町ひいては淡路島の歴史研究の一助になることを切望して終わりとしたい。

参考文献

白石太一郎「製塩」『弥生文化の研究』10雄山閣 1988

表1 土器観察表

図版番号	出土地区・層位	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調 (外面)	備考
1	1区 暗灰色砂質土	弥生土器 甕	口径 15.8 器高 (2.6)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方に強く肥厚、外側に面をなす。	内外面ともナデ調整。口縁端面に2条の浅い凹線文。	にぶい黄褐10Y R 5/3	
2	2～3区 暗灰色砂質土	弥生土器 甕	口径 13.2 器高 (2.6)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方強く肥厚、外側に面をなす。	内外面ともナデ調整。口縁端面に1条の凹線文。	浅黄橙7.5Y R 8/4	
3	1区 灰茶色砂	弥生土器 甕	口径 14.8 器高 (5.4)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方強く肥厚、外側に面をなす。	内面口頸部ナデ調整、体部ハケ目、外面ナデ調整。口縁端面に2条の凹線文。	褐灰7.5Y R 6/1	
4	1～2区 灰茶色砂	弥生土器 甕	口径 16.0 器高 (6.5)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方強く肥厚、外側上方に面をなす。	内面ナデ調整、外面頸部ナデ調整、体部ハケ目調整。頸部外面やや下に粘土継ぎ目痕、頸部と肥厚部粘土張付。口縁端面2条の凹線文。	黒褐10Y R 4/1	
5	2区 灰茶色砂	弥生土器 甕	口径 19.4 器高 (6.2)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方強く肥厚、外側に面をなす。体部直線的に開く。	内外面ともナデ調整。口縁端面3条の凹線文。	褐灰5Y R 4/1 ～にぶい黄橙10Y R 7/2	
6	3区 灰茶色砂	弥生土器 甕	口径 14.0 器高 (5.4)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方強く肥厚、外側に面をなす。頸部屈曲部に円孔(2穴)残。	内面ナデ調整。外面頸部下ハケ目調整、体部ナデ調整。口縁端面2条の凹線文。	にぶい橙5.5Y R 7/3	
7	3区 灰茶色砂	弥生土器 甕	口径 15.2 器高 (7.8)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方強く肥厚、外側に面をなす。体部直線的に開く。頸部外面に沈線状のきずあり。全体に薄手。	内面ナデ調整、外面頸部ナデ調整、ほかハケ目調整。口縁端部上方に粘土継足しによる肥厚。	灰白10Y R 8/2 ～黒褐2.5Y 3/1	
8	2区	弥生土器 甕	口径 17.1 器高 (2.2)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方強く肥厚、外側に面をなす。	内外面ともナデ調整。口縁端面に2条の凹線文。	橙5Y R 7/6	
9	8区 砂質土	弥生土器 甕	口径 15.6 器高 (6.6)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方強く肥厚、外側に面をなす。口縁内面わずかに凹む。	口縁内外面ともナデ調整。体部内面ナデ調整、外面ハケ目調整。	淡橙5Y R 8/4	
10	4区 暗灰色砂質土	弥生土器 甕	口径 22.4 器高 (6.6)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方強く肥厚、外側に面をなす。	内外面ともナデ調整。口縁端面に1条の凹線文。	にぶい橙7.5Y R 6/4	
11	2区 黒色砂質土	弥生土器 甕	口径 21.0 器高 (8.7)	「く」の字形の口頸部。口縁外側に面をなす。厚手。体部丸みをもつ。φ3mm以上の石英を多く含む。	内外面ともナデ調整。	灰白7.5Y R 8/2	

図版番号	出土地区・層位	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調 (外面)	備考
12	2区 黒色砂質土	弥生土器 甕	口径 14.6 器高 (8.0)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上下にわずかに肥厚、外側に面をなす。肩部あまり張らない。	内面ナデ調整、外面頸部ナデ調整、体部ハケ目調整。口縁端面に1条の浅い凹線文。	にぶい褐7.5 Y R 6/3	
13	5区 暗灰色砂質土	弥生土器 甕	口径 12.7 器高 (5.3)	「く」の字形の口頸部。口縁端部下方に垂下、外側に面をなす。肩部あまり張らない。	内面ナデ調整。口縁外面ナデ調整、体部ハケ目調整。頸部屈曲部で粘土継足す。	にぶい黄橙10 Y R 7/3	
14	4区 暗灰色砂質土	弥生土器 甕	口径 14.7 器高 (4.1)	「く」の字形の口頸部。口縁端部丸く終る。口縁付近は薄いが体部厚手。2次焼成受ける。	内外面ともナデ調整。	明赤褐 5 Y R 5/6	
15		弥生土器 甕	口径 16.4 器高 (3.7)	「く」の字形の口頸部。口縁端部上方にやや内湾。	内面、口縁外面ナデ調整、外面太目のハケ目調整。	淡橙 5 Y R 8/4	
16	4区 暗灰色砂質土	弥生土器 甕	口径 19.8 器高 (4.9)	「く」の字形の口頸部。口縁端部丸く終る。	頸部外面指頭圧痕による粘土はみ出し痕あり。体部タタキ (2条/cm)。	橙 5 Y R 7/8	
17	5区 粘質土	弥生土器 高杯 (杯部)	口径 22.0 器高 (3.4)	口縁端部上方に面をなす。外面に稜を持つ。	内外面ともナデ調整。外面に3条の凹線文。	橙2.5 Y R 7/8	
18	5区 暗灰色砂質土	弥生土器 高杯 (杯部)	口径 16.0 器高 (3.1)	口縁端部上方外側に面をなす。外面に稜を持つ。口縁内面やや凹む。	内外面ともナデ調整。稜部で粘土継足す。	淡橙 5 Y R 8/4	
19	1区 黒色砂質土	弥生土器 高杯 (杯部)	口径 19.3 器高 (3.3)	口縁端部上方に面をなす。外面にわずかに稜を持つ。	内外面ともナデ調整。稜上部に2条の浅い凹線文。	赤橙10 R 6/6	
20	2区 暗灰色砂質土	弥生土器 高杯 (杯部)	口径 25.7 器高 (3.1)	口縁端部上方外側に面をなす。外面に稜を持つ。	内外面ともナデ調整。稜部で粘土継足す。	橙7.5 Y R 6/6	
21	5区 暗灰色砂質土	弥生土器 高杯 (杯部)	口径 24.0 器高 (4.3)	口縁端部上方外側に面をなす。口縁下内外面ともわずかに凹む。	内外面ともナデ調整。稜部で粘土継足す。	橙 5 Y R 7/6	
22	1区 暗灰色砂質土	弥生土器 高杯 (杯部)	口径 21.4 器高 (5.0)	口縁端部上方やや外側に面をなし、内側に肥厚。外面稜を持つ。	内面ナデ調整、外面上部ナデ調整、下部粗いハケ目調整。端面3条の沈線。稜部で粘土継足す。	浅黄橙10 Y R 8/3	
23	1区 黒色砂質土	弥生土器 高杯 (杯部)	口径 23.0 器高 (5.0)	口縁端部上方やや外側に面をなし、内側に肥厚。外面稜を持つ。	内外面ともナデ調整。端面2条の沈線。稜部で粘土継足す。	明赤橙 5 Y R 5/6	
24	2区 暗灰色砂質土	弥生土器 高杯 (杯部)	口径 21.4 器高 (4.1)	ほぼ水平に大きく開く杯部。口縁端部やや立ち上がって丸く終る。	内面ナデ調整、外面ヘラ削り後、ナデ調整。外面調整粗い。口縁外面2条の凹線文。	にぶい橙7.5 Y R 7/4	
25	4区 暗灰色砂質土	弥生土器 高杯 (杯部)	器高 (5.0)	口縁端部上方に面をなす。外面に稜を持つ。口縁下に黒斑あり。φ2mm以上の石英多く含む。	内外面ともナデ調整。口縁下1条の凹線文。	橙 5 Y R 6/6	

図版番号	出土地区・層位	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調 (外面)	備考
26	3区 黒色砂質土	弥生土器 高杯 (杯部)	器高 (4.3)	口縁端部上方に面をなす。外面に黒斑あり。	内面と口縁端部ナデ調整。外面ヘラ磨き。	灰白10Y R 8/2	
27	3区 黒色砂質土	弥生土器 鉢	器高 (5.0)	口縁端部上方に面をなす。外面に黒斑あり。	内外面ともナデ調整。外面3条の凹線文。	灰白10Y R 8/1.5	
28	5区 暗灰色砂質土	弥生土器 鉢	器高 (3.8)	口縁端部上方に面をなす。円孔 (1穴) 残。砂粒多く含む。	内外面とも磨耗のため調整不明。外面2条の凹線文。	灰白10Y R 8/2	
29	6区 L K 03	弥生土器 鉢	器高 (4.1)	口縁端部上方に面をなす。φ2mm以上の石英多く含む。	内外面とも磨耗のため調整不明。外面4条の凹線文、刺突文。	褐灰7.5Y R 5/1	
30	1区 灰茶色砂	弥生土器 杯部	口径 27.6 器高 (5.9)	口縁端部上方に面をなす。体部稜をもって立ち上がる。	内外面とも磨耗のため調整不明。稜部で粘土継足す。口縁下と稜の上に1条、3条の凹線文。	浅黄橙7.5Y R 8/3	
31	2区 粘質土	弥生土器 杯部	口径 21.4 器高 (8.0)	口縁端部上方に面をなす。	内面ナデ調整。杯部と柱状部境に絞り目あり。外面縦方向のヘラ磨き。口縁外面に1条の凹線文。	褐灰10Y R 5/1	
32	1区 暗灰色砂質土	弥生土器 鉢	口径 22.0 器高 (4.3)	大きく外傾する。薄手。	内外面ともナデ調整。	橙2.5Y R 6/6~ 橙7.5Y R 6/6	
33	1区 暗灰色砂質土	弥生土器 脚部	底径 11.2 器高 (4.3)	裾端部外側下方に面をなす。外面黒斑あり。	内外面とも調整不明。	赤橙10R 6/6~ 暗灰N3/3	
34	1区 黒色砂質土	弥生土器 台付壺 (脚部)	底径 11.9 器高 (3.3)	円錐形の脚部。裾端部丸く終わる。2段の円孔 (5穴のうち、2穴未貫通) 残。	内面ヘラ削り後ナデ調整、外面ナデ調整。2条の凹線文。	灰白10Y R 8/2	
35	2区 暗灰色砂質土	弥生土器 脚部	底径 13.6 器高 (11.2)	円錐形の脚部。裾端部丸く終る。裾に円孔 (1穴) 残。	内外面とも調整不明。	灰白10Y R 7/1.5	
36	3区 暗灰色砂質土	弥生土器 高杯 (脚部)	器高 (2.4)	裾端部外側に面をなし、上方に肥厚。円孔 (3穴) 残。	内面調整不明、外面ナデ調整。	橙2.5Y R 7/5	
37	1区 黒色砂質土	弥生土器 高杯 (脚部)	底径 12.6 器高 (3.3)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側に面をなし、端部上方に肥厚。円孔 (4穴) 残。	内面ヘラ削り、外面ナデ調整。	浅黄橙10Y R 8/3	
38	2区 黒色砂質土	弥生土器 高杯 (脚部)	底径 14.2 器高 (2.3)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側に面をなし、端部上方外側に肥厚。円孔 (3穴) 残。	内外面ともナデ調整。	橙2.5Y R 6/6	
39	3区 黒色砂質土	弥生土器 高杯 (脚部)	底径 14.4 器高 (4.9)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側に面をなし、端部上方に肥厚。	内外面とも磨耗のため調整不明。	淡橙5Y R 8/4	
40	4区 黒色砂質土	弥生土器 高杯 (脚部)	底径 12.3 器高 (2.5)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側に面をなし、上方に肥厚。円孔 (3穴) 残。	外面ナデ調整、内面不明。	灰白10Y R 7/1	

図版番号	出土地区・層位	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調 (外面)	備考
41	2～3区 L X 06	弥生土器 高杯 (脚部)	底径 9.5 器高 (1.8)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側に面をなし、上方に強く肥厚。円孔 (1穴) 残。	内面へら削り、外面ナデ調整。	灰白10 Y R 8/1.5	
42	4区	弥生土器 高杯 (脚部)	底径 12.2 器高 (2.8)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側に面をなし、中央わずかに凹む。端部上方に肥厚。	内面へら削り後ナデ調整、外面ナデ調整。	灰黄2.5 Y 7/1.5	
43		弥生土器 高杯 (脚部)	底径 13.0 器高 (4.2)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側面をなし、上方に肥厚。へら描の線刻 (?) あり	内面へら削り、外面ハケ目調整、裾部ナデ調整。	橙5 Y R 7/6	
44	5区 暗灰色砂質土	弥生土器 高杯 (脚部)	器高 (3.6)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側に面をなし、上方に肥厚はせず、沈線状のものあり。円孔 (1穴) 残。	磨耗のため調整不明。	淡橙5 Y R 8/4	
45	7区 粘質土	弥生土器 高杯 (脚部)	底径 9.5 器高 (2.8)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側に面をなし、1条の凹線文。円孔 (1穴) 残。	磨耗のため調整不明。	淡橙5 Y R 8/4	
46	6～7区 暗灰色砂質土	弥生土器 高杯 (脚部)	底径 7.0 器高 (6.4)	ラッパ状に開く脚部。裾端部外側に面をなす。円孔 (1穴) 残。	磨耗のため調整不明。	淡橙5 Y R 7/6	
47	3区 黒色砂質土	弥生土器 高杯 (脚部)	胴径 4.4 器高 (6.5)	筒状の脚柱部。なだらかに裾部に続く。	内面横方向のへら削り、裾側は未調整、外面ナデ調整、裾部縦方向のへら磨き。脚柱部やや下に7条の凹線文。	灰白10 Y R 8/2	
48	2区 暗灰色砂質土	弥生土器 高杯 (脚部)	底径 7.5 器高 (7.5)	筒状の脚柱部に「ハ」の字形に開く裾部。裾端部外側に面をなし、上方に肥厚。円孔 (3穴) 残。	内面ナデ調整、脚部上方に絞り痕あり。外面ナデ調整。脚部と裾部の境に7条の沈線。	白灰10 Y R 8/2.5	
49	2区 暗灰色砂質土	弥生土器 器台 (脚部)	底径 20.0 器高 (5.9)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部下方に面をなし、内側にやや肥厚。	内面調整不明、外面ナデ調整。2条の凹線文。	橙5 Y R 6/8	
50	3区 黒色砂質土	弥生土器 器台 (脚部)	口径 16.9 器高 (7.5)	ほぼ垂直に開く脚部。裾端部下方に面をなし、内側に肥厚。	内外面ともナデ調整。4条の凹線文。	赤橙10 R 6/8	
51	4区 暗灰色砂質土	弥生土器 器台 (脚部)	器高 (11.1)	ほぼ垂直に開く脚部。裾端部外側下方に面をなす。厚手。	内面調整不明、指頭圧痕あり。外面ナデ調整。裾部と脚基部にそれぞれ2条の浅い凹線文。	橙5 Y R 7/6	
52	2区 暗灰色砂質土	弥生土器 器台 (脚部)	器高 (9.9)	直線的に開く脚部。裾端部内側やや凹む。裾端部外面黒斑あり。	内面調整不明、外面へら削り後ハケ目調整。裾部外面にほとんど退化した1条の凹線文、脚基部上方に2条の太浅い凹線文。	灰白2.5 Y 8/2	

図版番号	出土地区・層位	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調 (外面)	備考
53	5区 暗灰色砂質土	弥生土器 器台 (脚部)	底径 20.0 器高 (7.3)	「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側に面をなす。裾部外面に黒斑あり。	内外面とも磨耗のため調整不明。外面裾部に浅い2条の凹線文。	浅黄橙7.5YR 8/3	
54	4区 暗灰色砂質土	弥生土器 器台 (脚部)	底径 14.8 器高 (9.8)	大きく「ハ」の字形に開く脚部。裾端部外側下方に面をなす。裾部内側に粘土折り返し痕あり。厚手。	内面よこ方向のヘラ削り、外面磨耗のため調整不明。脚基部付近、裾部に2条、3条の浅い凹線文。	にぶい黄褐10YR 7/2	
55	3区 黒色砂質土	弥生土器 無頸壺	口径 15.0 器高 (5.0)	口縁端部上方にほぼ水平に面をなす。体部大きく内湾。外面に黒斑あり。	内外面ともナデ調整。口縁下と体部屈曲部付近に1条の凹線文。	浅黄橙10YR 8/3	
56	2区 黒色砂質土	弥生土器 無頸壺	口径 7.9 器高 (5.1)	口縁ほぼ垂直に立ち上がり、端部上方に面をなす。口縁直下に円孔2穴。	内外面ともナデ調整。	灰5Y 5/1	
57	3区 黒色砂質土	弥生土器 無頸壺	器高 (3.0)	口縁端部外側に面をなす。	内面ナデ調整。口縁端面連続刺突文、体部簾状文。	黒褐2.5Y 3.5/1	
58	4区 灰色砂	弥生土器 無頸壺	器高 (2.7)	口縁端部外側に面をなす。端面下に円孔 (1穴)。	内面ナデ調整。口縁端面連続刺突文、体部簾状文。	淡橙5YR 8/4~ 灰白10YR 8/1	
59	5区 暗灰色砂質土	弥生土器 壺	口径 17.4 器高 (3.8)	口縁端部上方に面をなし、内側に肥厚。	内外面ともナデ調整。外面2条の凹線文。	橙2.5YR 6.5/8	
60	1区 黒色砂質土	弥生土器 壺	口径 15.2 器高 (6.3)	口縁大きく外反。口縁端部外側に面をなし、上下に肥厚。	内面ナデ調整、外面口縁下ナデ調整、頸部ハケ目調整。口縁端面2条の凹線文。	赤橙10R 6/6	
61	暗灰色砂質土	弥生土器 壺	口径 12.0 器高 (4.8)	口縁外反。口縁端部外側に面をなし、上下に強く肥厚。頸部ほぼ直立。	内面ナデ調整。下方肥厚部粘土継足す。口縁端面3条の凹線文を施した後、波状文。頸部2条の凹線文。	灰白10YR 7/1	
62	2区 砂質土	弥生土器 壺	口径 15.2 器高 (4.7)	口縁大きく外反。口縁端部外側に面をなし、上下に肥厚。	内面ナデ調整。口縁端面に3条の凹線文、頸部3条以上の凹線文。	浅黄橙7.5YR 8/4	
63	4区 黒色砂質土	弥生土器 壺	口径 23.0 器高 (2.7)	「く」の字形の口頸部。口縁端部外面に面をなし、上方に肥厚。	内外面ともナデ調整。端面に3条の凹線文。	にぶい黄橙10YR 7.5/2	
64	3区 黒色砂質土	弥生土器 壺	口径 23.6 器高 (2.3)	口縁大きく外反。口縁端部外側に面をなし、下方に肥厚。	内外面ともナデ調整。口縁端面4条の凹線文を施した後、上下2段に竹管文。	橙2.5YR 7/8	
65	3区 黒色砂質土	弥生土器 壺	器高 (2.1)	口縁大きく外反。口縁端部外側に面をなし、上下に肥厚。	内外面ともナデ調整。口縁端面5条の凹線文を施した後、上下2段に竹管文。	橙2.5YR 7/8	
66	4区 暗灰色砂質土	弥生土器 壺	口径 30.0 器高 (2.3)	口縁大きく外反。口縁端部外側に面をなし、上下に肥厚。	内外面ともナデ調整。口縁端面4条の浅い凹線文を施したあと上下2段に竹管文。	橙2.5YR 5.5/8	

図版番号	出土地区・層位	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調 (外面)	備考
67	3区 暗灰色砂質土	弥生土器 壺	器高 (2.5)	口縁ほぼ水平にひらき、端部外側に面をなす。	外面ナデ調整。口縁内面格子状文。口縁端面浅い3条の凹線文。	浅黄橙7.5YR 8/3	
68	3区 黒色砂質土	弥生土器 壺	器高 (6.8)	口縁ラッパ状に開く。口縁端部外側に面をなし、上方にわずかに肥厚。	内外面ともナデ調整。口縁内面に連続刺突文。	にぶい黄橙10YR 7/2	
69	2区 灰茶色砂	弥生土器 壺	頸部径 16.2 器高 (7.4)	体部屈曲して広がる。	内外面ともナデ調整、内面指頭圧痕あり。頸部外面に5条の凹線文。	浅黄橙7.5YR 8/3	
70	3区 L X 06	弥生土器 壺 (頸部)	器高 (10.0)	直線的な頸部より屈曲して体部へ広がる。頸部器壁厚手。	内面頸部ナデ調整、下方に指頭圧痕、体部内面横方向のハケ目調整、外面縦方向のハケ目調整。頸部7条の凹線文。	灰白10YR 8/2	
71	2区 黒色砂質土	弥生土器 壺 (頸部)	体部最大径 12.2 器高 (9.0)	体部のみ残存。体部算盤玉形。	内面未調整で指頭圧痕著しい。外面ナデ調整。屈曲部上方上下2段に刺突文。	浅黄橙10YR 8/3	
72	4区 暗灰色砂質土	弥生土器	口径 26.6 器高 (4.7)	口縁端部外側に強く肥厚。体部ほぼ直立。	内外面ともナデ調整。口縁肥厚部粘土張付による。	橙5YR 7/8	
73	8区 暗灰色砂質土	弥生土器	口径 25.0 器高 (4.9)	口縁端部上方と外側に面をなし、内側に肥厚。	内外面ともにナデ調整。内面指頭圧痕あり。	にぶい黄橙10YR 7/2	
74	3区 黒色砂質土	弥生土器 把手	幅 1.9 厚 1.55	断面やや角ばった半円形。		明赤褐2.5YR 5/8	
75	4区 暗灰色砂質土	弥生土器 把手	幅 2.2 厚 1.25	一部体部内壁残存。断面長方形。		にぶい橙5YR 7/4	
76	5区 粘質土	弥生土器 底部	底径 5.9 器高 (2.6)	平底。底部わずかに凹む。体部直線的に立ち上がる。	内面底部未調整、外面ハケ目調整。	にぶい褐7.5YR 5/4	
77	3区 暗灰色砂質土	弥生土器 底部	底径 6.3 器高 (2.7)	平底。体部やや外反しながら立ち上がる。	内面底部わずかに指頭圧痕あり。外面へら削り後ナデ調整。	にぶい褐7.5YR 5/3.5	
78	3区 暗灰色砂質土	弥生土器 底部	底径 4.0 器高 (3.5)	平底。体部直線的に立ち上がる。	内面ナデ調整、外面調整不明。	黄灰2.5YR 3.5/1	
79	1区 黒色砂質土	弥生土器 底部	底径 5.1 器高 (3.3)	平底。体部外反ぎみに立ち上がる。	内外面ともナデ調整。	にぶい赤褐5YR 5/4	
80	1区 黒色砂質土	弥生土器 底部	底径 6.6 器高 (2.6)	平底。体部直線的に立ち上がる。	内面ハケ目調整、外面下から上へのへら削り。	にぶい黄橙10YR 6/3	
81	3区 黒色砂質土	弥生土器 底部	底径 5.9 器高 (3.3)	平底。体部直線的に立ち上がる。 Ø2mm以上の砂粒多く含む。	内外面とも調整不明。	赤橙10R 6/8	
82	3区 黒色砂質土	弥生土器 底部	底径 7.4 器高 (2.7)	平底。体部直線的に立ち上がる。	内外面とも調整不明。	黒褐10YR 3/1	
83	3区 黒色砂質土	弥生土器 底部	底径 5.3 器高 (2.3)	平底。体部直線的に立ち上がる。	内外面ともナデ調整。	灰白10YR 8/2 ～にぶい赤橙10R 6/4	

図版番号	出土地区・層位	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調 (外面)	備考
84	3区 黒色砂質土	弥生土器 底部	底径 3.9 器高 (2.0)	平底。	内面調整不明、外面へら削り後ナデ調整。底部木葉痕あり。	浅黄橙10YR 8/3	
85	1区 暗灰色砂質土	弥生土器 底部	底径 4.6 器高 (6.2)	平底。体部直線的に立ち上がる。	内面底部未調整。体部内外面ともナデ調整。	灰白10YR 8/2	
86	3区 黒色砂質土	弥生土器 底部	底径 7.4 器高 (6.0)	平底。底部凹む。体部内湾ぎみに立ち上がる。	内面幅広のへら削り、外面へら磨き。	にぶい黄橙10YR 7/3	
87	3区 黒色砂質土	弥生土器 底部	底径 6.9 器高 (3.2)	平底。底部やや突出する。体部ゆるやかに立ち上がる。外面黒斑あり。	内面ナデ調整、外面へら削り後ナデ調整。	橙5YR 7/8~ 灰N 3.5/0	
88	3区 L X 06	弥生土器 底部	底径 9.6 器高 (6.1)	平底。体部ゆるやかに外反して立ち上がる。外面黒斑あり。	内面底部未調整、体部ナデ調整。外面底部ナデ調整、体部縦方向のへら削り後ナデ調整。	褐灰10YR 6/1 ~にぶい黄橙10YR 7/2	
89	4区 黒色砂質土~灰茶色砂	弥生土器 底部	底径 8.3 器高 (5.2)	平底。底部凹む。体部ほぼ直線的に立ち上がる。外面黒斑あり。	内面上から下へのへら削り、外面ナデ調整。	灰白10YR 8/2	
90	2区 橙灰色粘質土	弥生土器 底部	底径 2.3 器高 (1.4)	底部小さく丸底に近い。	内面ナデ調整、外面タタキ目(4条/cm)。	浅黄橙10YR 8/3	
91	6区 L K 03	弥生土器			内面ナデ調整、外面連続刺突文。	にぶい橙7.5YR 7/3	
92	2区 黒色砂質土	弥生土器		体部湾曲強い。	内面細目のハケ目、外面波状文(1段)、簾状文(3段)。	灰白10YR 8/2	
93	2区 黒色砂質土	弥生土器		厚手。体部かなり張出す。	内面ナデ調整、外面7条の直線文(3段)、波状文(1段)、斜格子文。	灰白7.5YR 8/2	
94	2区 黒色砂質土	弥生土器			内面調整不明、外面直線文、3条の斜格子文。	褐灰7.5YR 4.5/1	
95	4区 黒色砂質土	弥生土器			内面ナデ調整、外面10条の細い直線文(1段)、同じ櫛で波状文(2段)施す。	橙5YR 7/6	
96	3区 暗灰色砂質土	弥生土器		丸みを帯びた底部。2次焼成を受ける。	内面調整不明、外面ハケ目調整。	明赤褐2.5YR 5/6 ~黒10YR 2/1	
97	3区 暗灰色砂質土	弥生土器		内面黒斑あり。	内面ハケ目調整、外面太目幅広のタタキ目(3条/cm)を施した後、櫛描列点文。	浅黄橙10YR 7.5/3	
98	2区 灰茶色砂	弥生土器			内面ナデ調整、外面太目のタタキ目(3条/cm)。	にぶい黄橙10YR 7/2	
99	3区 黒色砂質土	弥生土器			内面ハケ目、外面ナデ調整後櫛描列点文。	灰黄褐10YR 6/2	
100	5区 黒色砂質土	弥生土器			内外面ともナデ調整。外面刺突文、円孔(1穴)残。	灰褐7.5YR 4/2	

図版番号	出土地区・層位	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調 (外面)	備考
101	1区 黒色砂質土	弥生土器			内面ハケ目調整、 外面ナデ調整。頸 部刺突文。	橙5Y R 6/6~ 褐灰10Y R 5/1	
102	4区 暗灰色砂質土	弥生土器		逆円錐形に開く体 部。	内面磨耗のため調 整不明、外面タタ キ目 (4条/cm)。	橙5Y R 7/8	
103	3~5区 橙灰色粘質土~ 黒色砂質土	製塩土器 脚台部	底径 5.0 器高 (2.0)	脚台部が「ハ」の 字状に外側に開く。	脚台部上半に指頭 圧痕。	灰赤10R 6/2	
104	5区 暗灰色砂質土~ 黒色砂質土	製塩土器 脚台部	底径 5.0 器高 (1.8)	脚台部が「ハ」の 字状に外側に開く。		灰白5Y 8/1	
105	5区 暗灰色砂質土	製塩土器 脚台部	底径 4.9 器高 (2.2)	脚台部が「ハ」の 字状に外側に開く。	脚台部内面に接合 痕。	灰白10Y R 8/2、 部分的に灰赤10 R 6/2	
106	3区 暗灰色砂質土	製塩土器 脚台部	底径 4.5 器高 (1.7)	脚台部が「ハ」の 字状に外側に開く。	脚台部と体部の境 界に接合痕。	橙5Y R 7/6	
107	5区 粘質土~砂質土	製塩土器 脚台部	底径 4.0 器高 (2.9)	体部が外側に緩や かに膨らむ。脚台 部端部に亀裂。	脚台部と体部境界 に指頭圧痕。	灰白10Y R 8/2	
108	6区 粘質土	製塩土器 脚台部	底径 4.7 器高 (1.9)	脚台部内面の凹み 少ない。二次焼成 のためか亀裂あり。	脚台部上半に指頭 圧痕。	灰赤10R 6/2	
109	暗灰色砂質土	製塩土器 脚台部	底径 4.1 器高 (2.2)	脚台部内面の凹み が少なく、体部が 外側に緩やかに膨 らむ。脚台部内面 二次焼成あり。	脚台部と体部境界 に指頭圧痕。	浅黄橙7.5Y R 8/4、部分的に 灰N 4/0	
110	1区 暗灰色砂質土	製塩土器 脚台部	底径 5.6 器高 (3.9)	脚台部は緩やかに 外側に開き、体部 が直線的に斜め上 方にのびる。	脚台部と体部の境 界に指頭圧痕、体 部外面タタキ目残 る。(2条/cm)	浅黄橙10Y R 8/3、部分的に 灰N 4/0	底径・器 壁とも大。
111	1区 暗灰色砂質土	製塩土器	器高 (5.1)	体部が斜め上方に ほぼ直線的にのび る。外面の二次焼 成著しい。	脚台部と体部の境 界に指頭圧痕、体 部外面タタキ目残 る。(3条/cm)	灰N 4/0、部分 的に灰白10Y R 8/2	
112	2~3区 橙灰色粘質土	製塩土器	器壁 0.7		内面に布目残る。	浅黄橙7.5Y R 8/6	丸底Ⅳ式 ?
113	2~3区 橙灰色粘質土	製塩土器	器壁 1.0		内面に布目残る。	浅黄橙7.5Y R 8/4	丸底Ⅳ式 ?
114	5区 暗灰色砂質土	黒色土器 底部	底径 7.8 器高 (1.9)	断面逆三角形の高 台が付く。	底部外面回転ヘラ 削り。	浅黄橙7.5Y R 8/6	
115	3区 橙灰色粘質土	黒色土器 底部	底径 7.4 器高 (1.8)	断面逆三角形の高 台が付く。	内外面調整不明。	橙5Y R 6/6	
116	1区 暗灰色砂質土	土師器 皿? (口縁部)	口径 19.2 器高 (1.9)	口縁部がわずかに 外反し、内面に凹 み。	内面は横ナデ。外 面不明。	浅黄橙7.5Y R 8/3	
117	3区 P P 16	土師器 甕? (体部)	器高 (5.2)		外面に荒い縦方向 のハケ目調整。	にぶい赤褐5 Y R 4/4	
118	4区 暗灰色砂質土	須恵器 坏 (底部)	底径 9.8 器高 (1.5)		底部外面ヘラ切り 後ナデ調整。	灰白10Y 8/1	
119	橙灰色粘質土	須恵器 坏 (底部)	底径 6.6 器高 (1.1)		底部外面ヘラ切り 後ナデ調整。	灰N 6/0	
120	2区 橙灰色粘質土	須恵器 底部	器高 (1.3)		ヘラ切り後ナデ調 整?。	灰N 6/0	
121	1区 橙灰色粘質土・ 暗灰色砂質土	須恵器 坏	口径 11.6 底径 8.0 器高 3.7	やや太めの低い高 台が底部端に付く。	口縁から底部にか けて内外面とも回 転ナデ。	灰白N 8/0	

図版番号	出土地区・層位	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調 (外面)	備考
122	1区 橙灰色粘質土	須恵器 底部	底径 10.2 器高 (1.6)	比較的低い高台が 底部端に付く。	底部外面へラ切り 後ナデ、内面は回 転ナデ。	灰白N7/0	
123	暗灰色砂質土	須恵器 塊 (底部)	底径 9.0 器高 (3.9)	高い高台が外側に 「ハ」の字状に付 く。	底部外面ナデ調整。	灰N6/0	
124	粘質土	須恵器 塊 (底部)	底径 8.0 器高 (3.0)	体部が湾曲しなが ら立ち上がる。	へラ切り後ナデ調 整。	灰N6/0	
125	3区 暗灰色砂質土	須恵器 塊 (底部)	底径 5.8 器高 (2.3)	高い高台が底部端 に垂直に付く。	へラ切り後ナデ調 整。	灰N6/0	
126	暗灰色砂質土	須恵器 壺? (底部)	底径 10.0 器高 (4.3)	体部が斜め上方に 直線的にのびる。 体部外面に自然釉。	体部内面に回転ナ デ調整顕著に残る。	灰N5/0	
127	1区 黒色砂質土	須恵器 坏 (蓋)	口径 17.7 器高 (1.1)	天井部が直線的に のびる。		灰N7/0	L X 32直 下より出 土。
128	2区 橙灰色粘質土	須恵器 坏 (蓋)	器高 (1.3)	天井部が口縁部付 近でわずかに屈曲 する。		灰白N7/0	
129	2区 粘質土	須恵器 壺/甕 (口縁部)	口径 25.2 器高 (3.2)	口縁端部をわずか につまみあげる。	内外面とも回転ナ デ調整。	灰N5/0	

表2 石器・石製品観察表

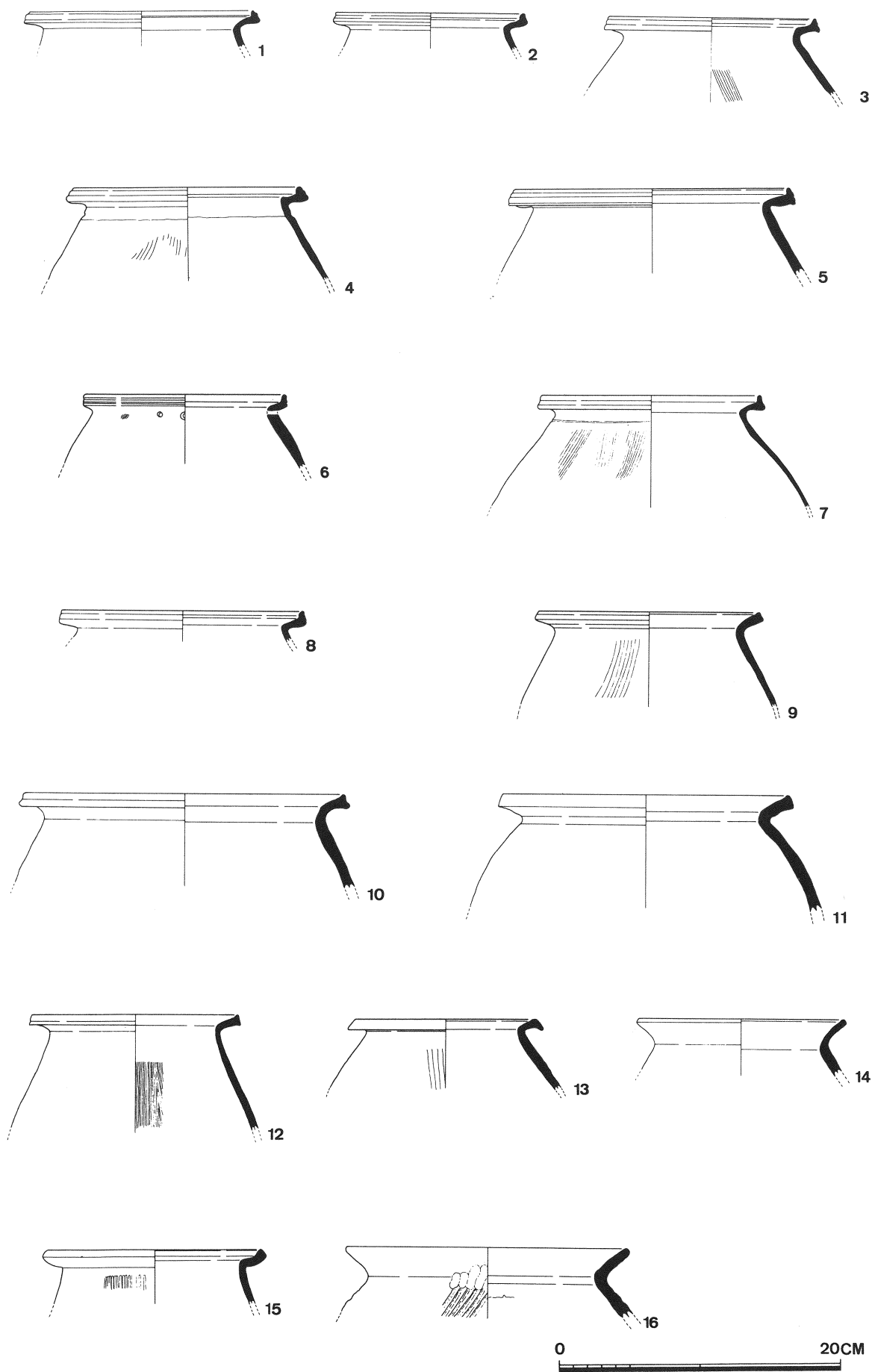
図版番号	出土地区・層位	器種	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	遺存状態	備考
1	5区 橙灰色粘質土	凹基無茎式石鏃		(1.6)	0.26	0.26	(0.5)	かえし一方欠	サヌカイト製、風化著しい
2	6区 黒色砂質土	凸基無茎式石鏃		2.95	1.1	0.39	1.2	完形	サヌカイト製、二上山産?
3	7区 黒色砂質土	凸基無茎式石鏃		(3.05)	0.95	0.585	(1.5)	先端欠	サヌカイト製
4	7区 粘質土	凸基有茎式石鏃	I	(2.1)	1.55	0.505	(1.2)	先端欠	サヌカイト製
5	5区 暗灰色砂質土	凸基有茎式石鏃	I	2.0	(1.5)	0.4	(1.1)	かえし一方欠	サヌカイト製
6	3区 暗灰色砂質土	凸基有茎式石鏃	I	(2.7)	1.5	0.35	(1.2)	先端欠	サヌカイト製
7	2区 暗灰色砂質土	凸基有茎式石鏃	I	2.95	1.55	0.455	1.6	完形	サヌカイト製
8	2区 暗灰色砂質土	凸基有茎式石鏃	I	2.05	1.4	0.43	1.0	一部新欠	サヌカイト製
9	7区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	I	(2.25)	1.55	0.41	(1.1)	先端欠	サヌカイト製
10	5区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	I	3.25	1.7	0.53	2.3	完形	サヌカイト製
11	5区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	I	1.9	(1.85)	0.46	(1.1)	かえし一方新欠	サヌカイト製
12	灰茶色砂	凸基有茎式石鏃	I	(1.95)	1.2	0.33	(0.6)	先端欠	サヌカイト製
13	4区 砂質土	凸基有茎式石鏃	II	3.0	1.7	0.65	2.7	完形	サヌカイト製、やや風化
14	6区 暗灰色砂質土	凸基有茎式石鏃	III	(3.9)	2.25	0.57	(3.9)	先端わずかに欠	サヌカイト製
15	5区 暗灰色砂質土	凸基有茎式石鏃	III	(3.6)	2.0	0.51	(2.6)	先端欠	サヌカイト製
16	3区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	III	(3.3)	2.35	0.65	(3.4)	先端欠	サヌカイト製
17	1区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	III	(2.0)	2.2	0.49	(2.3)	先端欠	サヌカイト製
18	7区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	III	(2.7)	2.0	0.46	(2.4)	茎部・先端欠	サヌカイト製
19	6区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	III	(3.35)	(1.95)	0.37	(2.4)	茎部・かえし一方欠	サヌカイト製
20	6区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	III	(2.95)	2.2	0.52	(2.9)	先端欠	サヌカイト製
21	5区 P P 04	凸基有茎式石鏃	III	(2.9)	1.9	0.43	(1.8)	茎部・先端欠	サヌカイト製
22	7区 砂質土	凸基有茎式石鏃	III	(2.75)	1.95	0.465	(2.4)	茎部・先端欠	サヌカイト製
23	3区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	III	(2.8)	1.9	0.6	(2.2)	先端欠	サヌカイト製
24	7区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	III	(3.35)	1.7	0.45	(2.0)	茎部欠	サヌカイト製、風化著しい

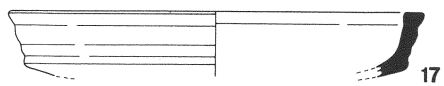
図版番号	出土地区・層位	器種	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	遺存状態	備考
25	6区 灰茶色砂	凸基有茎式石鏃	Ⅲ	(3.65)	1.7	0.495	(2.5)	先端欠	サヌカイト製
26	7区 砂質土	凸基有茎式石鏃	Ⅲ	3.35	1.7	0.575	2.8	先端欠	サヌカイト製
27	5区 暗灰色砂質土	凸基有茎式石鏃	Ⅲ	(2.6)	1.85	0.51	(1.4)	先端欠	サヌカイト製
28	2区	凸基有茎式石鏃	Ⅲ	(2.3)	1.65	0.45	(1.7)	先端欠	サヌカイト製
29	7区 灰茶色砂	凸基有茎式石鏃	Ⅳ	3.5	1.55	0.43	1.8	完形	サヌカイト製
30	2区 黒色砂質土	凸基有茎式石鏃	Ⅴ	(3.35)	2.1	0.55	(3.1)	先端欠	サヌカイト製
31	3区 暗灰色砂質土	凸基有茎式石鏃	Ⅵ	(3.95)	1.2	0.42	(2.3)	先端欠	サヌカイト製
32	2区 粘質土	鏃身		(2.85)	1.25	0.48	(1.2)	先端のみ 残存	サヌカイト製
33	7区 黒色砂質土	鏃身		(2.0)	1.35	0.355	(1.2)	鏃身のみ 残存	サヌカイト製
34	7区 暗灰色砂質土	鏃身		(2.1)	1.45	0.34	(0.8)	先端のみ 残存	サヌカイト製、風化著しい
35	2区 粘質土	鏃身		(3.95)	1.75	0.54	(2.7)	先端のみ 残存	サヌカイト製、やや風化
36	7区 灰茶色砂	鏃身		(3.05)	1.7	0.37	(1.9)	先端・かえし・茎部欠	サヌカイト製
37	6区 灰茶色砂	鏃身		(1.55)	1.3	0.33	(0.6)	鏃身のみ 残存	サヌカイト製
38	1区 橙灰色粘質土	石錐		3.1	1.3	0.43	1.8		サヌカイト製
39	5区 黒色砂質土	石錐		3.55	1.45	0.47	1.8		サヌカイト製
40	1区 黒色砂質土	石錐		2.5	1.5	0.36	1.0		サヌカイト製、風化著しい
41	1区 橙灰色粘質土	石錐		4.3	1.85	0.5	2.3	完形	サヌカイト製
42	1区 黒色砂質土	石錐		3.05	1.8	0.52	1.7		サヌカイト製
43	4区	打製石包丁		(5.5)	3.45	0.58	(16.4)		サヌカイト製
44	5区 橙灰色粘質土	未製品		3.9	2.05	0.67	4.6		サヌカイト製
45	4区 黒色砂質土	未製品		4.05	1.95	0.49	3.5		サヌカイト製
46	6区 黒色砂質土	未製品		3.6	1.85	0.61	3.2		サヌカイト製
47	7区 黒色砂質土	未製品		2.85	1.8	0.44	2.3		サヌカイト製
48	3区 黒色砂質土	未製品		4.55	2.35	0.64	6.9		サヌカイト製
49	1区 黒色砂質土	未製品		3.75	1.6	0.595	2.9		サヌカイト製

図版番号	出土地区・層位	器種	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	遺存状態	備考
50	2区 暗灰色砂質土	未製品		3.75	2.45	0.76	4.5		サヌカイト製
51	5区 灰茶色砂	未製品		3.85	2.15	0.69	5.4		サヌカイト製
52	1区 黒色砂質土	石核		3.35	2.75	0.65	6.8		サヌカイト製
53	3区 黒色砂質土	石核		3.2	3.25	0.73	8.9		サヌカイト製
54	2区 黒色砂質土	石核		3.95	2.4	0.745	6.9		サヌカイト製
55	4区 黒色砂質土	石核		6.9	2.45	0.71	11.2		サヌカイト製
56	4区 灰茶色砂	石核		4.05	2.9	0.89	9.5		サヌカイト製
57	3区 黒色砂質土	石核		4.3	3.35	0.68	8.3		サヌカイト製
58	6～7区 橙灰色粘質土	石核		3.35	3.65	0.635	5.6		サヌカイト製
59	4区	石核		3.85	2.65	0.71	6.4		サヌカイト製
60	3区	砥石		15.5	5.0	2.5	265		砂岩系
61	5区 黒色砂質土			10.4	2.6	0.9	40.8		結晶片岩
62	8区 黒色砂質土	タタキ石		11.3	8.9	6.75	955		砂岩系

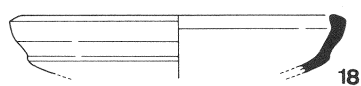
表3
土錘觀察表

図版番号	出土地区・層位	器種	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)
1	暗灰色砂質土	管状土錘	I	8.2	4.9	179.9
2	暗灰色砂質土	管状土錘	I	(6.75)	5.35	(161.6)
3	橙灰色粘質土	管状土錘	I	7.3	4.7	170.8
4	3区 暗灰色砂質土	管状土錘	II	(3.8)	1.5	(8.4)
5	3区 帶黄灰色粘質土	管状土錘	II	(3.4)	0.9	(2.5)
6	1区 黒色砂質土	管状土錘	II	2.65	0.9	1.8
7	3区	棒状土錘	III	(6.4)	1.8	(24.5)
8	3区 暗灰色砂質土	棒状土錘	III	(4.9)	2.3	(19.0)
9	3区 暗灰色砂質土	棒状土錘	IV	(3.5)	1.15	(5.8)
10	3区 暗灰色砂質土	棒状土錘	IV	(5.2)	1.45	(13.2)
11	3区 暗灰色砂質土	棒状土錘	IV	6.75	1.6	20.8
12	1区 黒色砂質土	棒状土錘	IV	6.8	1.4	16.8
13	攪乱土	有溝土錘	V	6.2	3.9	(83.5)
14	4区 粘質土	有溝土錘	V	7.7	(3.7)	(76.1)
15	2区 暗灰色砂質土	有溝土錘	V	8.4	(4.1)	(120.6)
16	4区 P P 13	有溝土錘	V	(6.6)	3.4	(99.7)

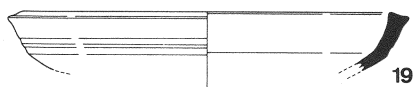




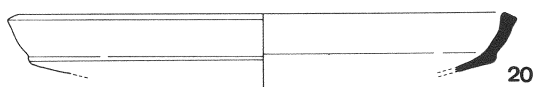
17



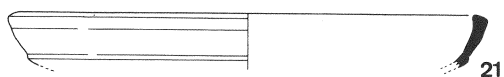
18



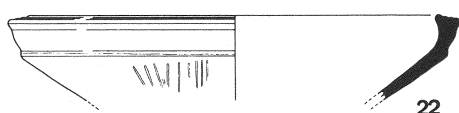
19



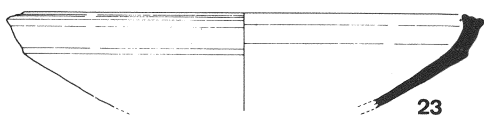
20



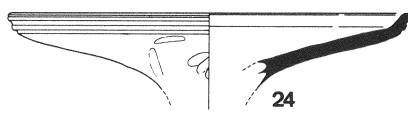
21



22



23



24



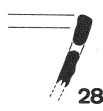
25



26



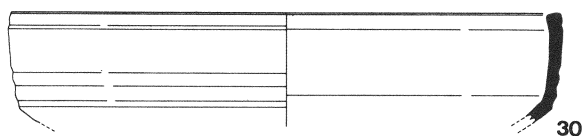
27



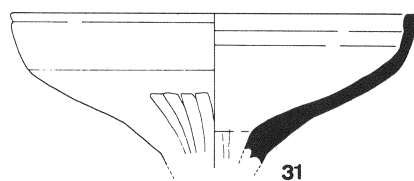
28



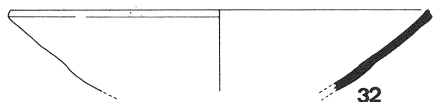
29



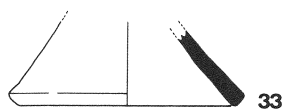
30



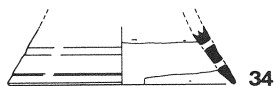
31



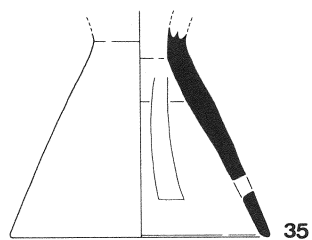
32



33

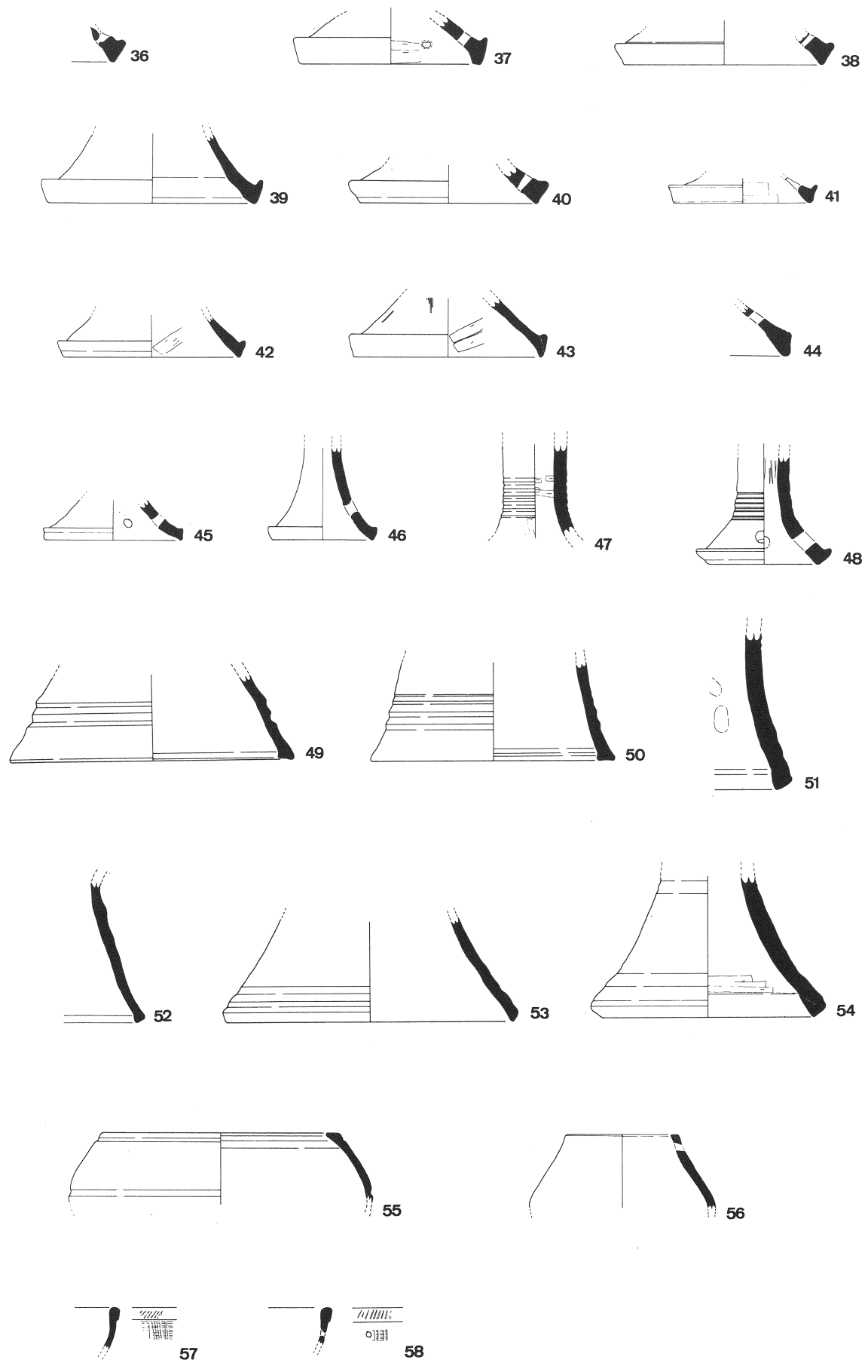


34

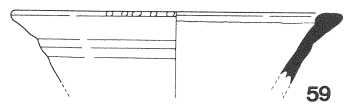


35

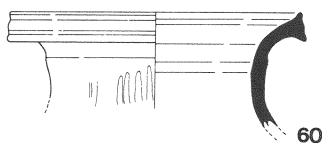




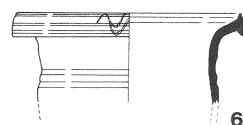
0 20CM



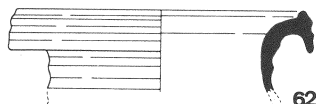
59



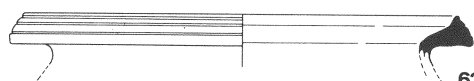
60



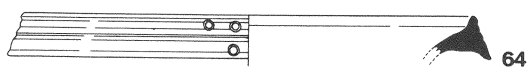
61



62



63



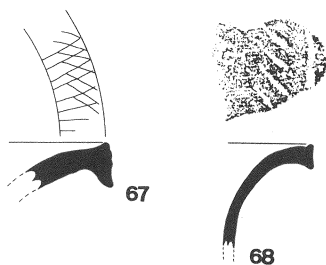
64



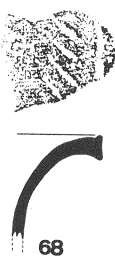
65



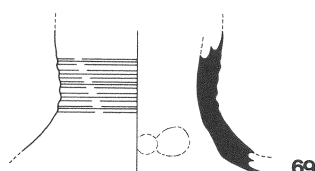
66



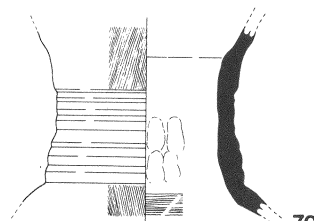
67



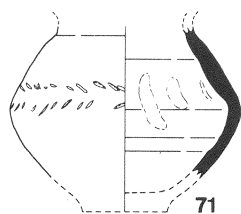
68



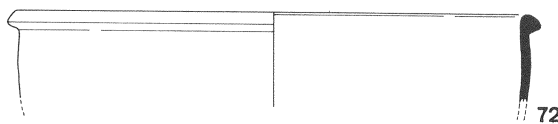
69



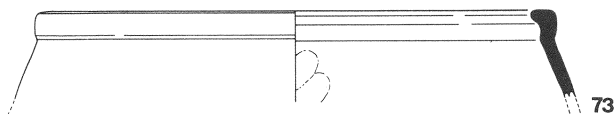
70



71



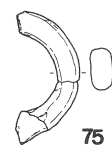
72



73

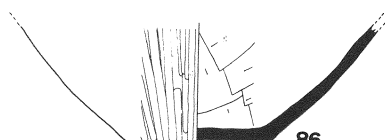
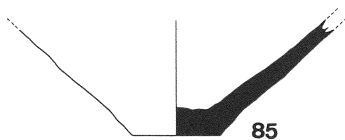
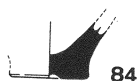
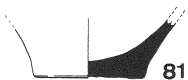
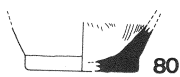
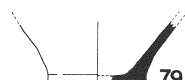
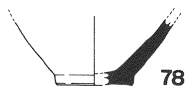
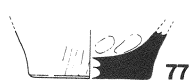
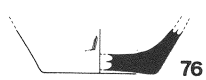


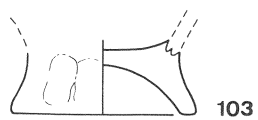
74



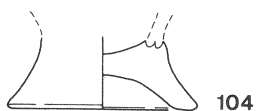
75







103



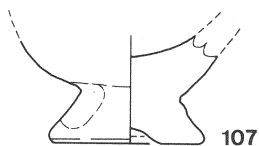
104



105



106



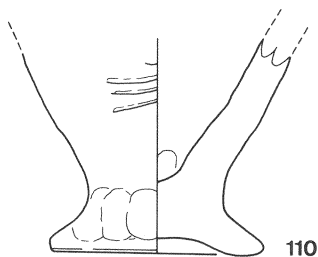
107



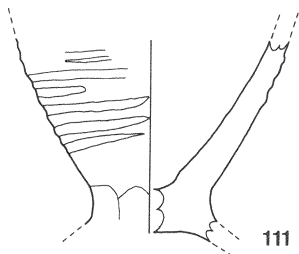
108



109



110



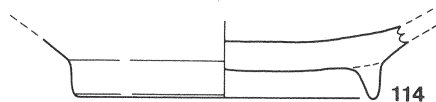
111



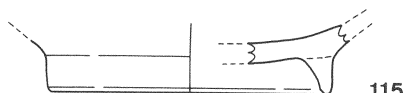
112



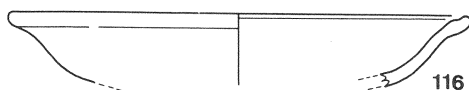
113



114



115

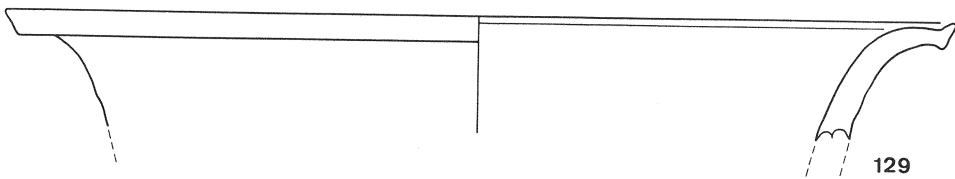
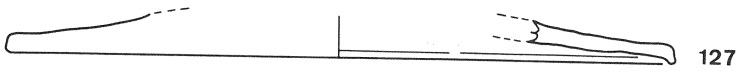
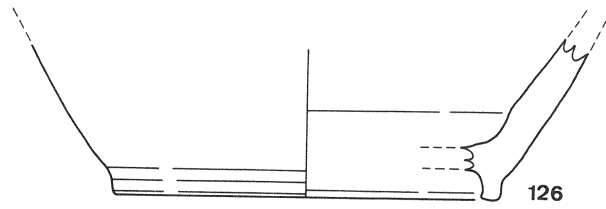
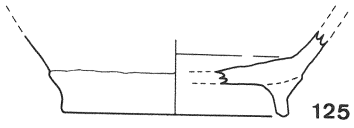
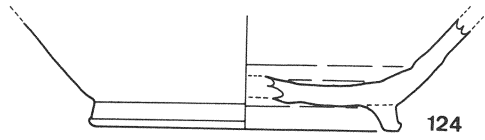
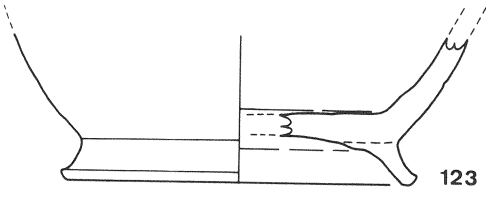
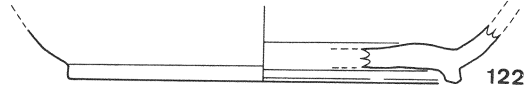
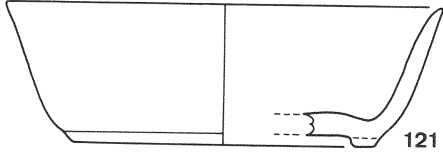
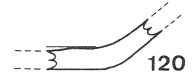
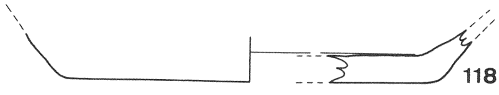


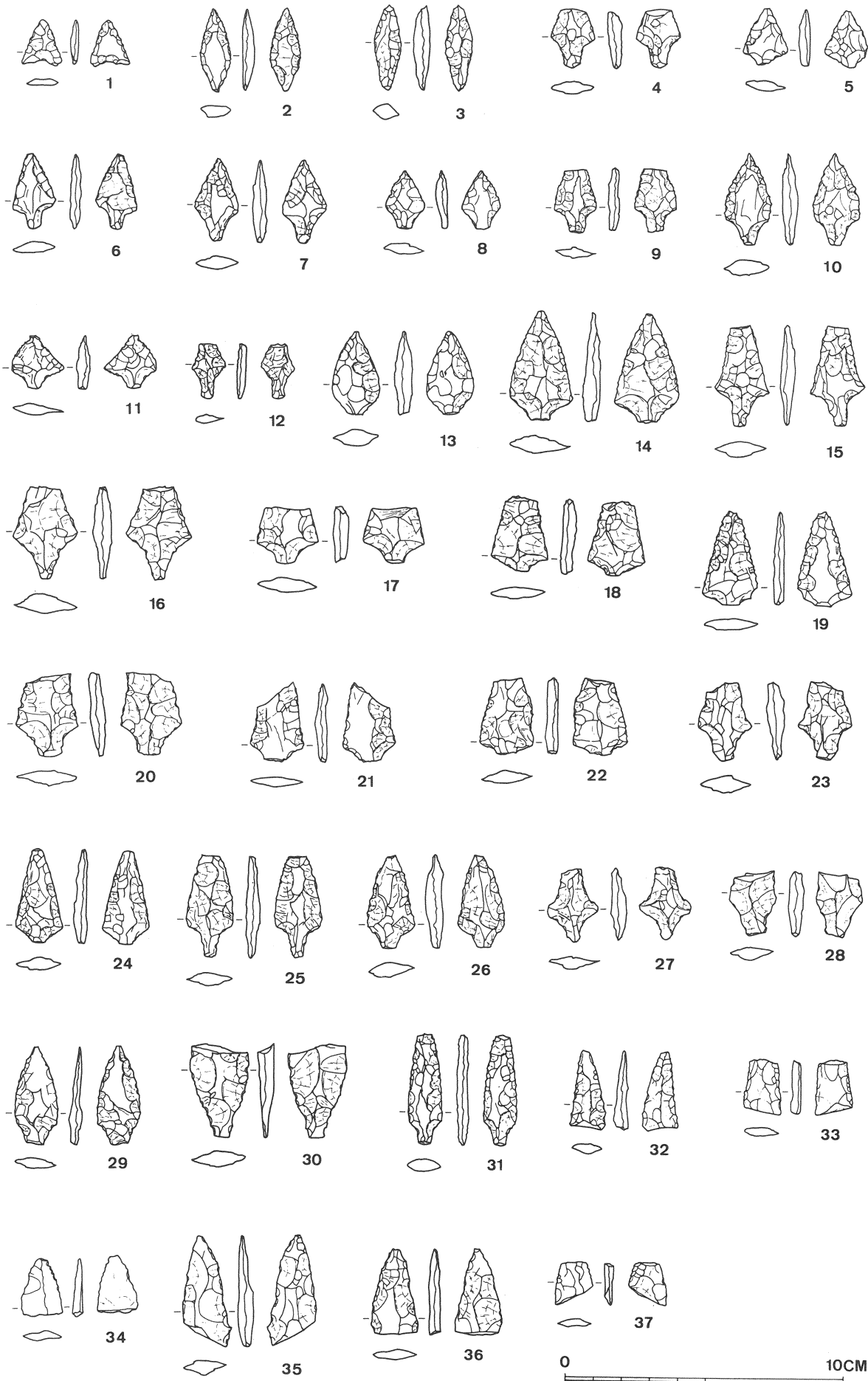
116

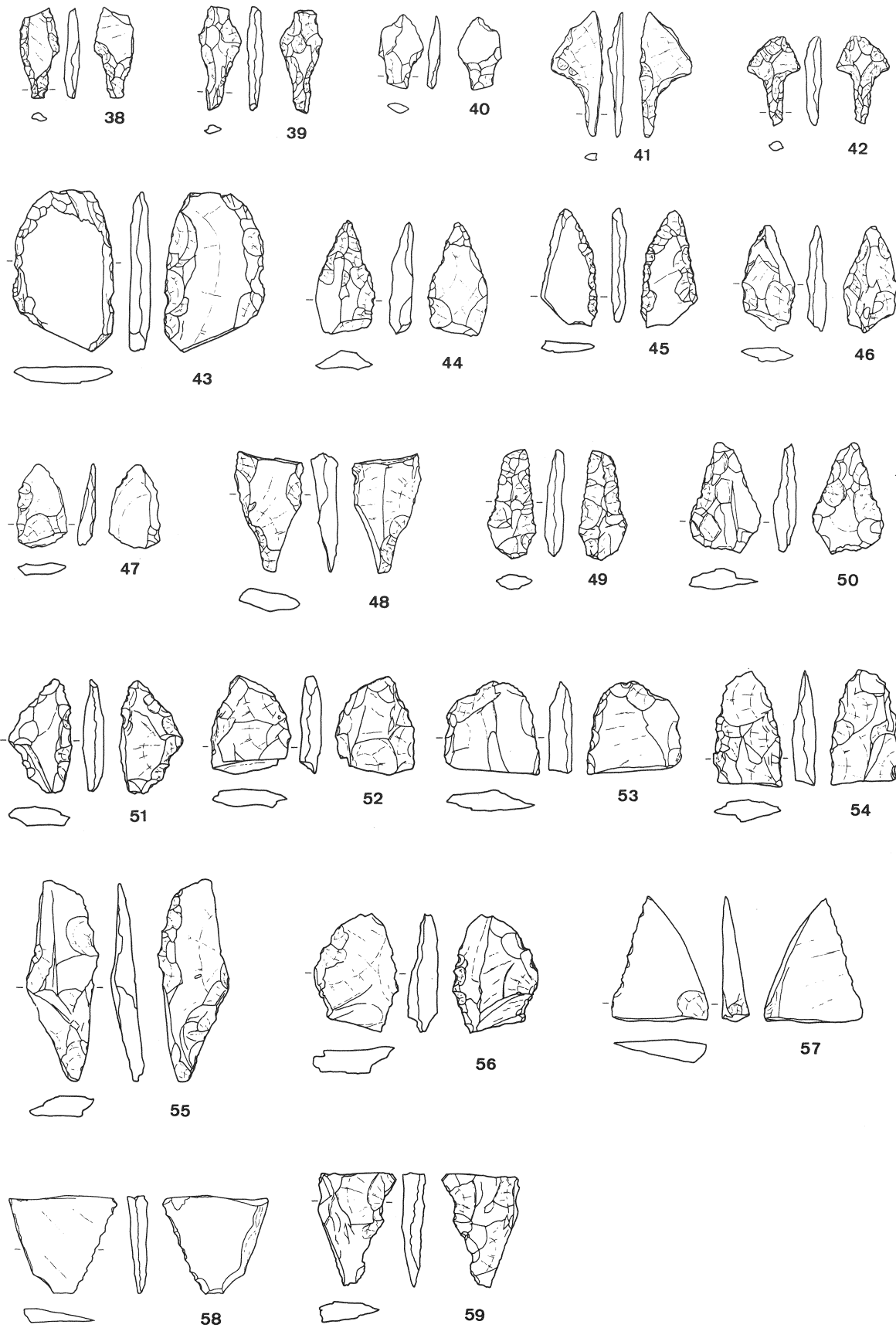


117

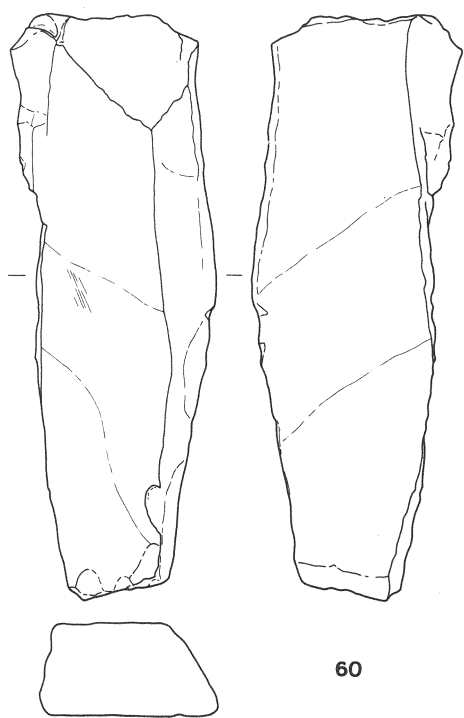




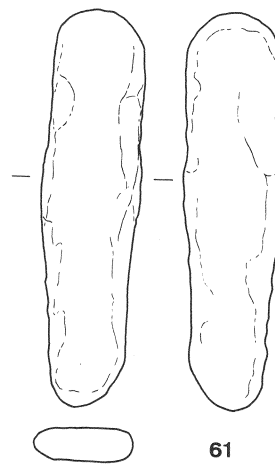




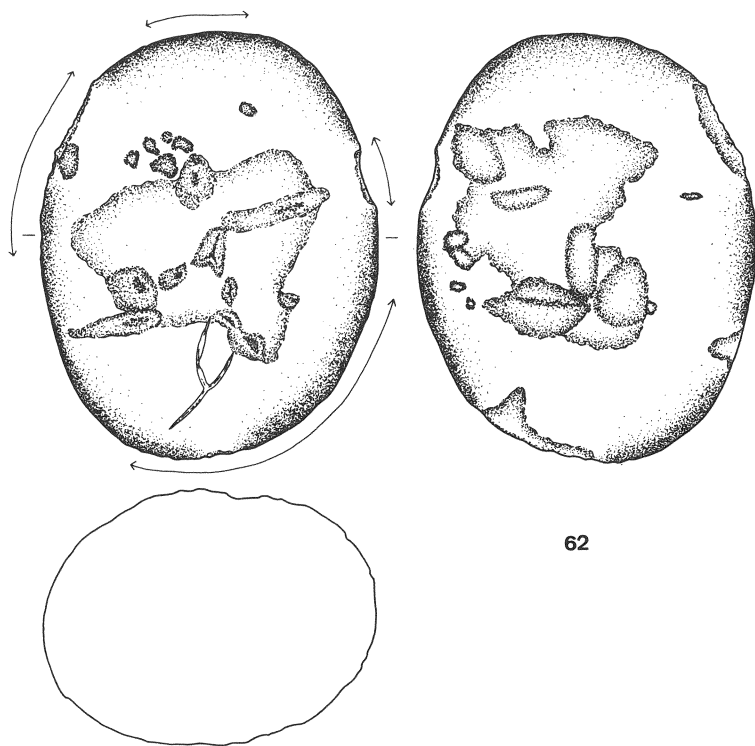
0 10CM



60

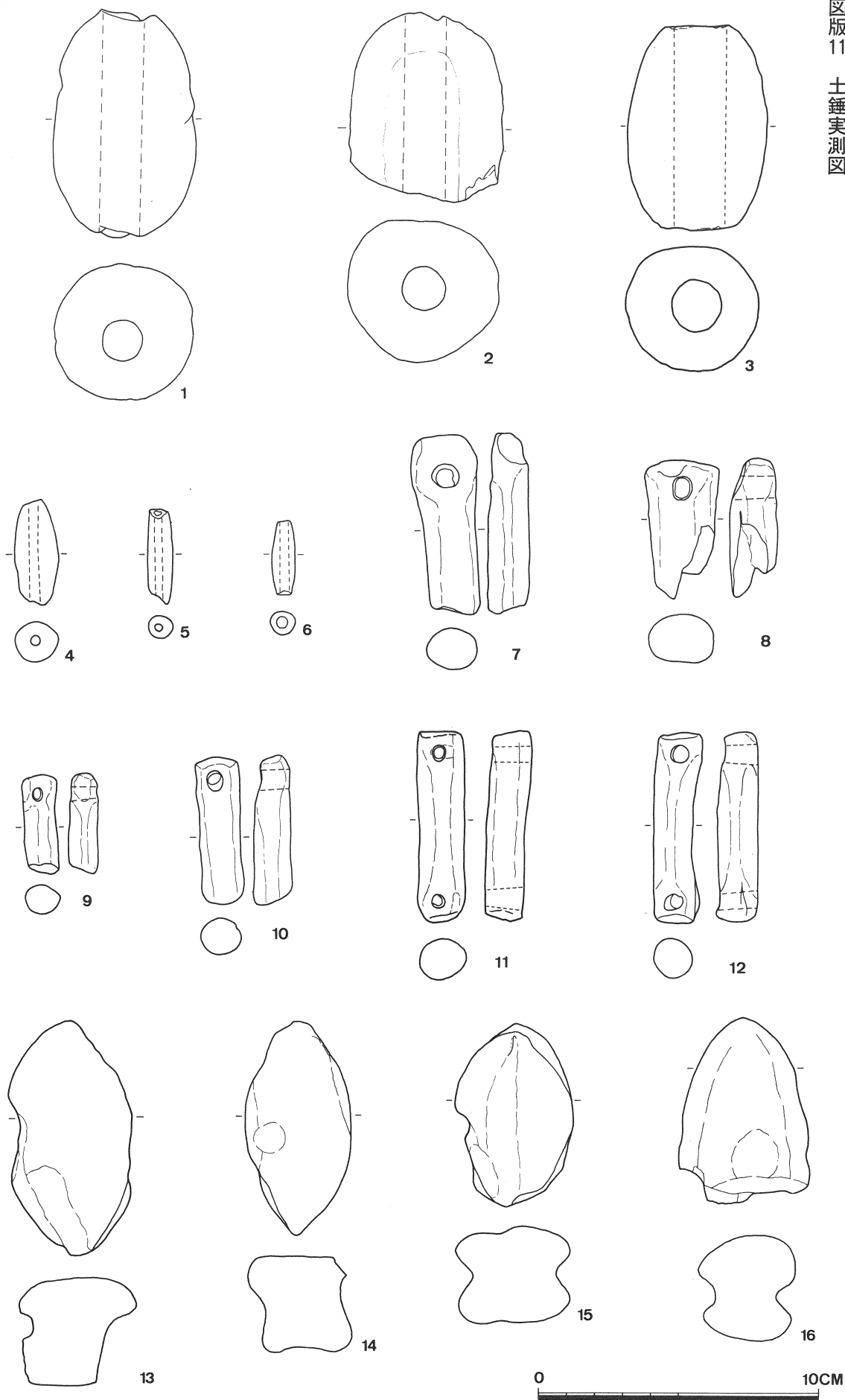


61



62

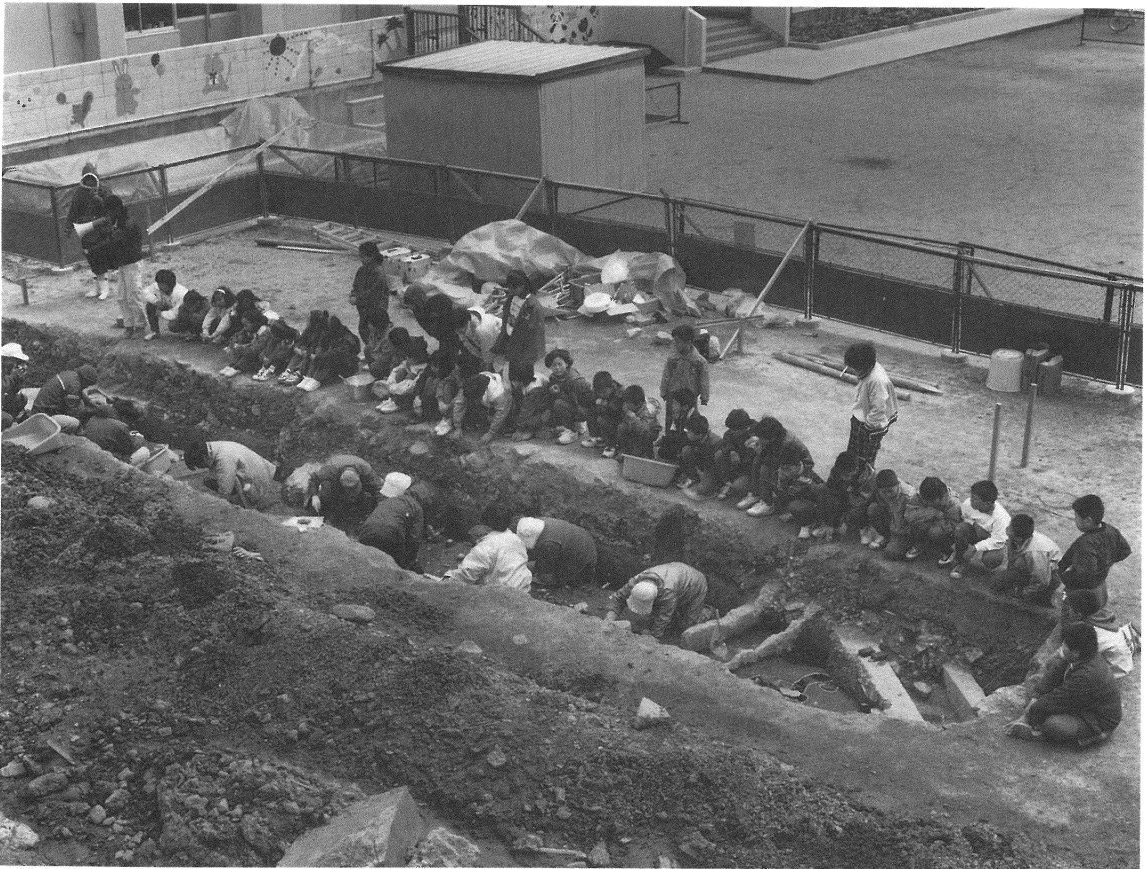




0 10CM



図版12 調査地近景(南より)・地元小学生への説明会(西より)





図版 13 調査区全景（拡張後・北西より）・南壁層序（北より）



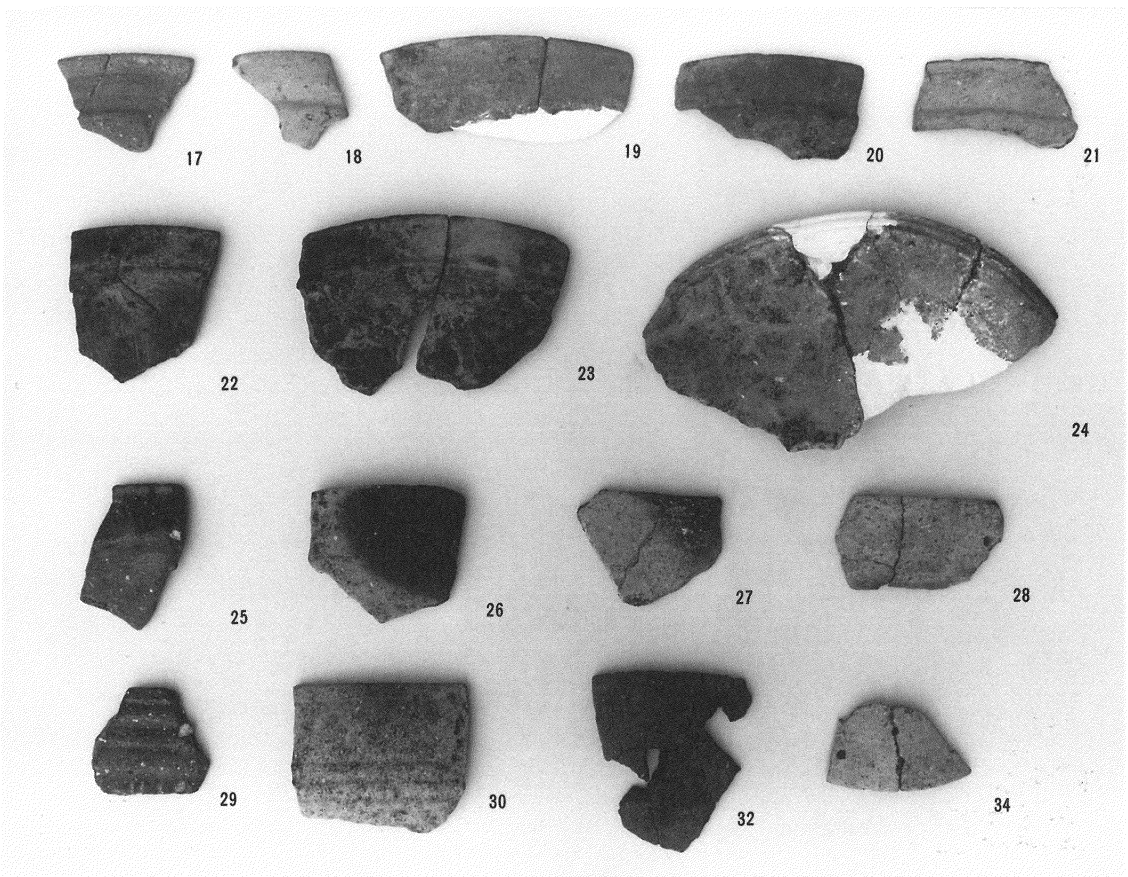
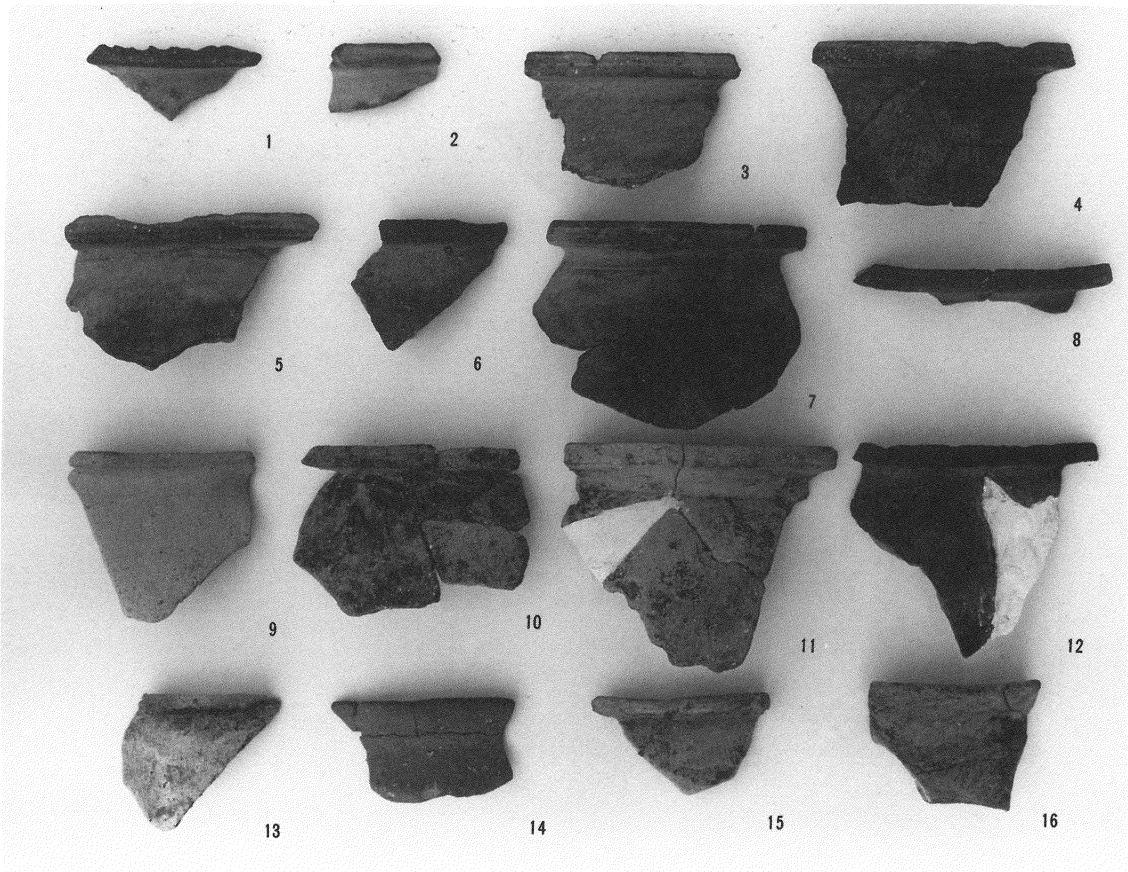
図版14
LX 32 (南東より)・PP 13 土錘出土状況 (西より)

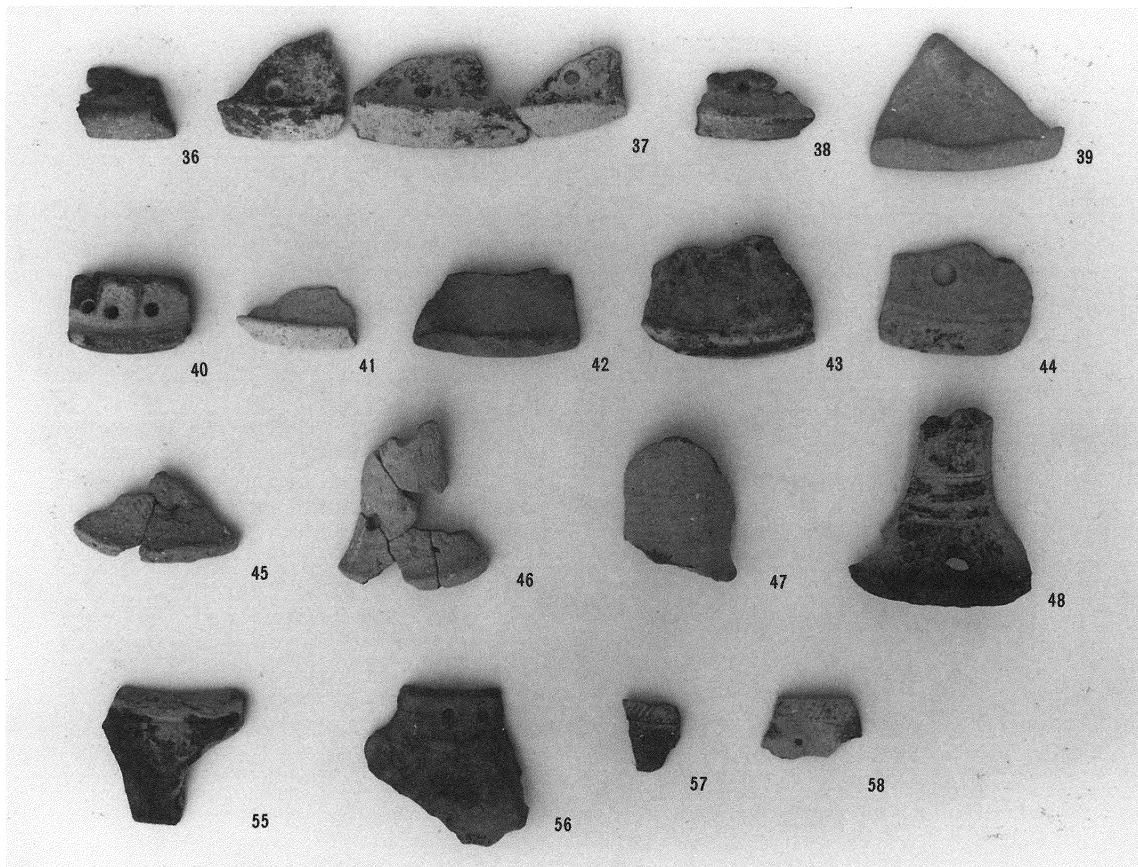
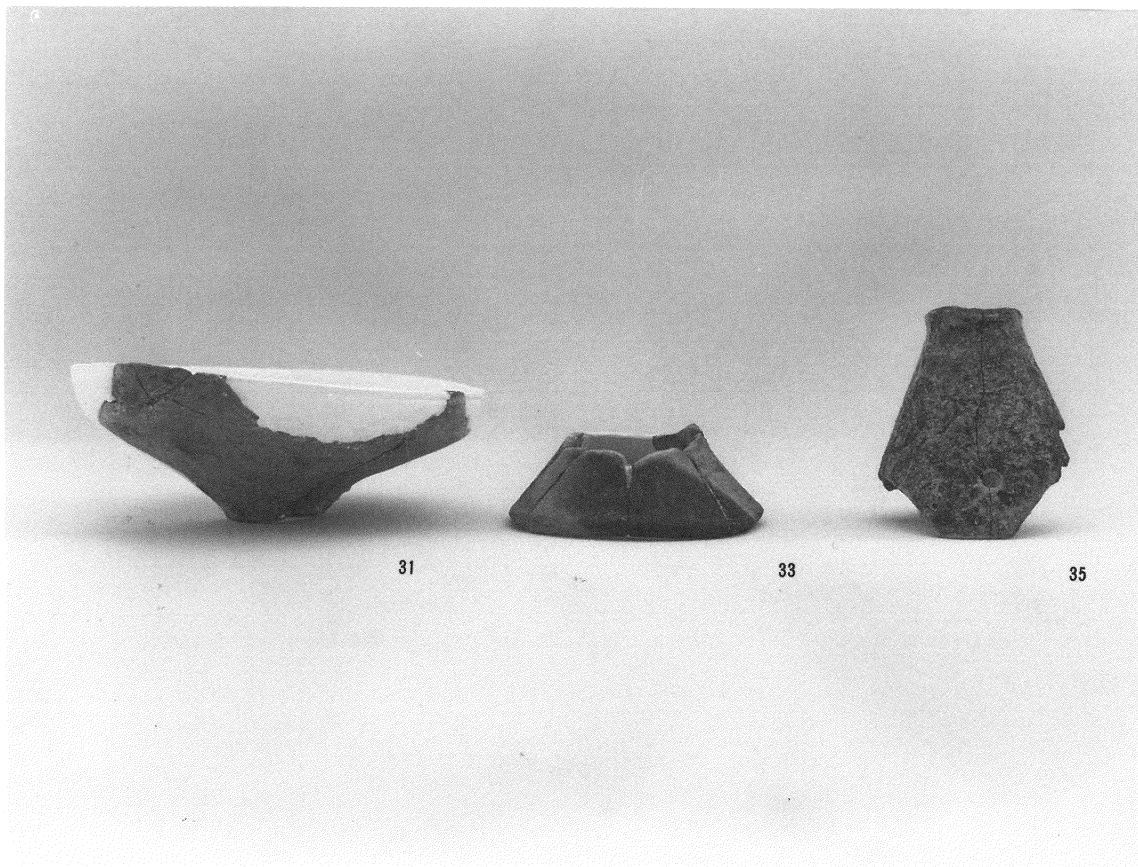


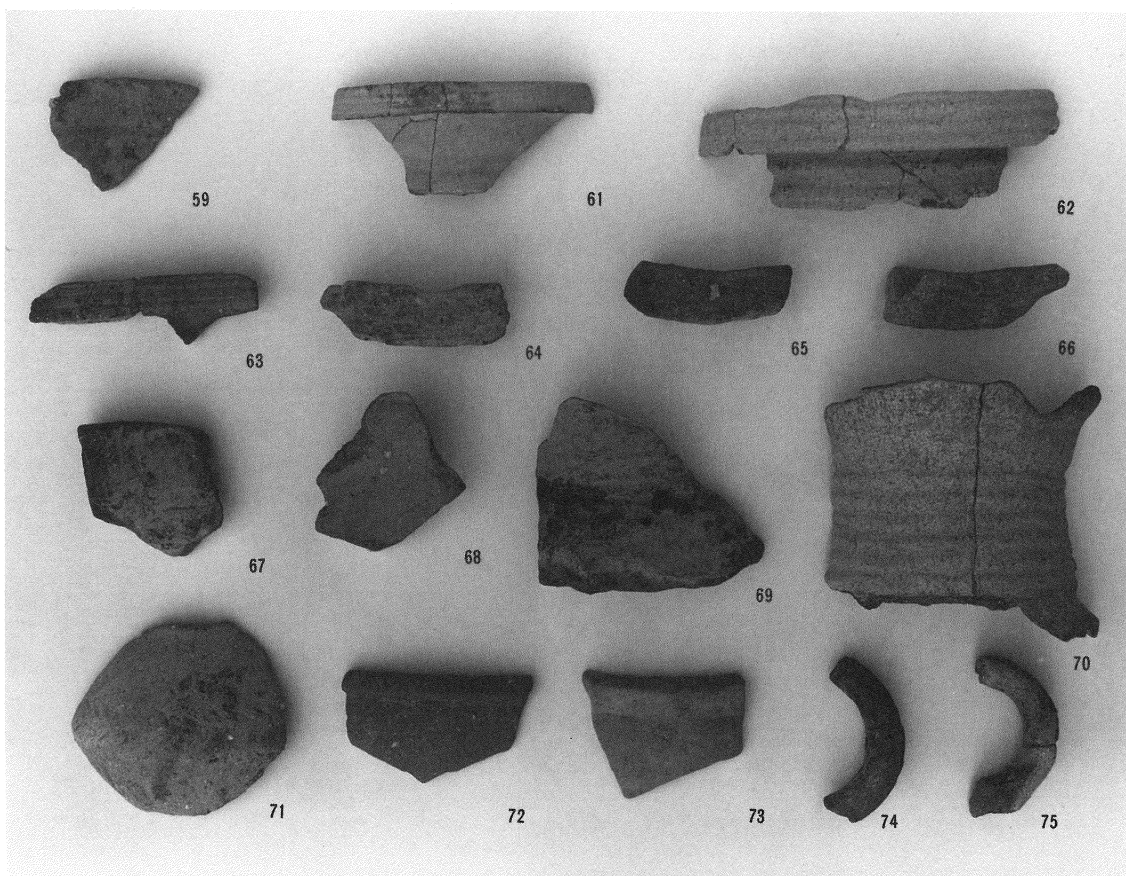
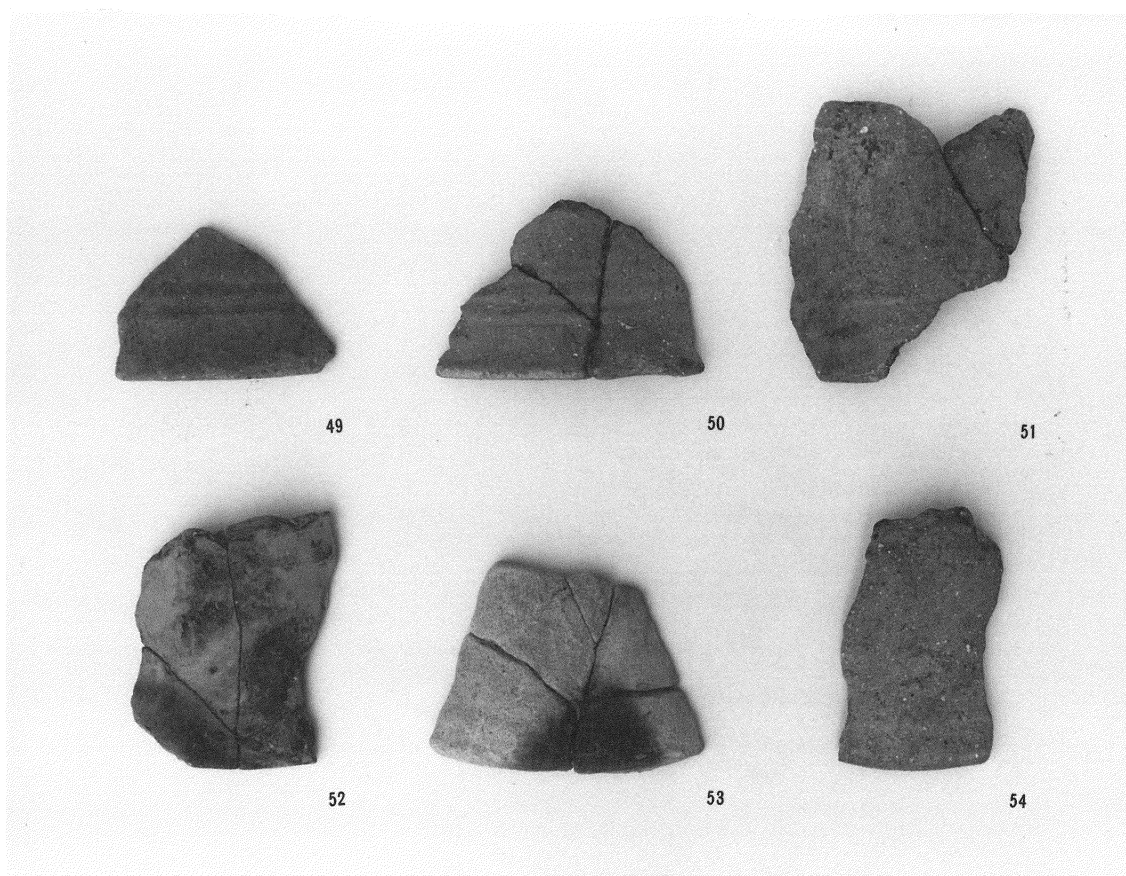


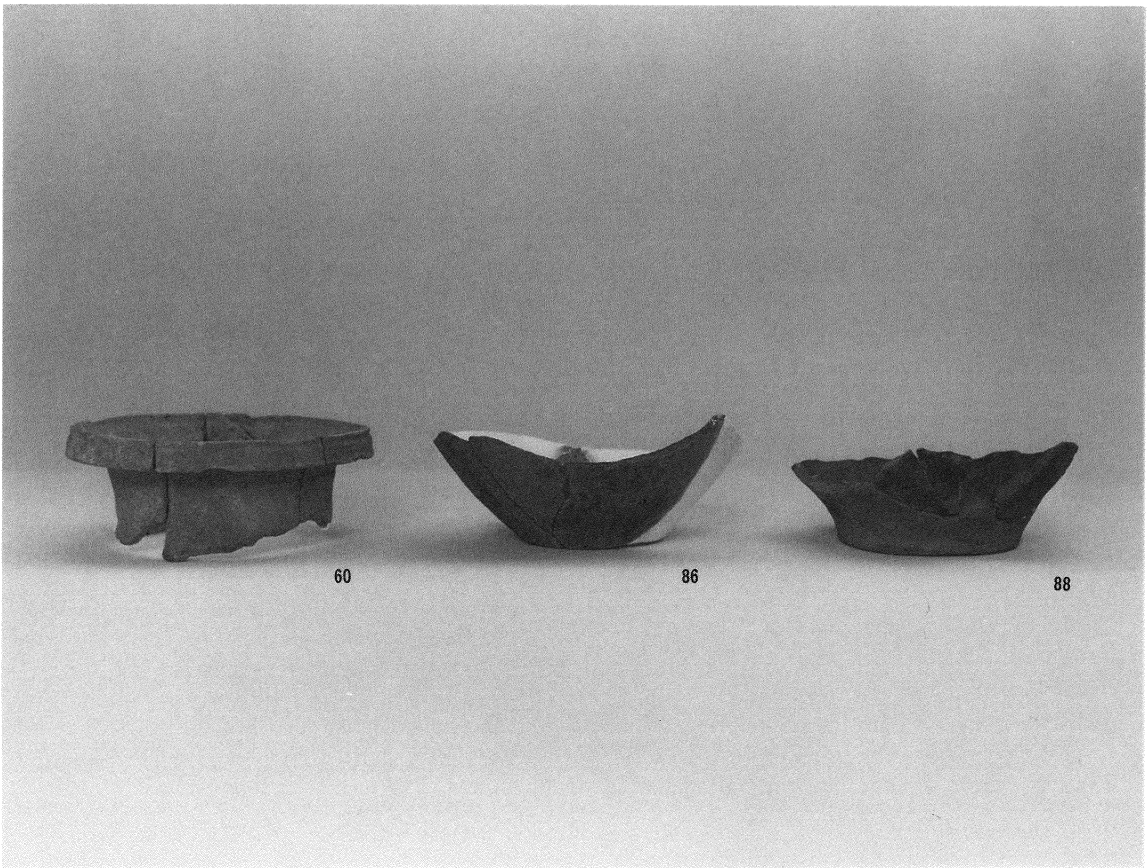
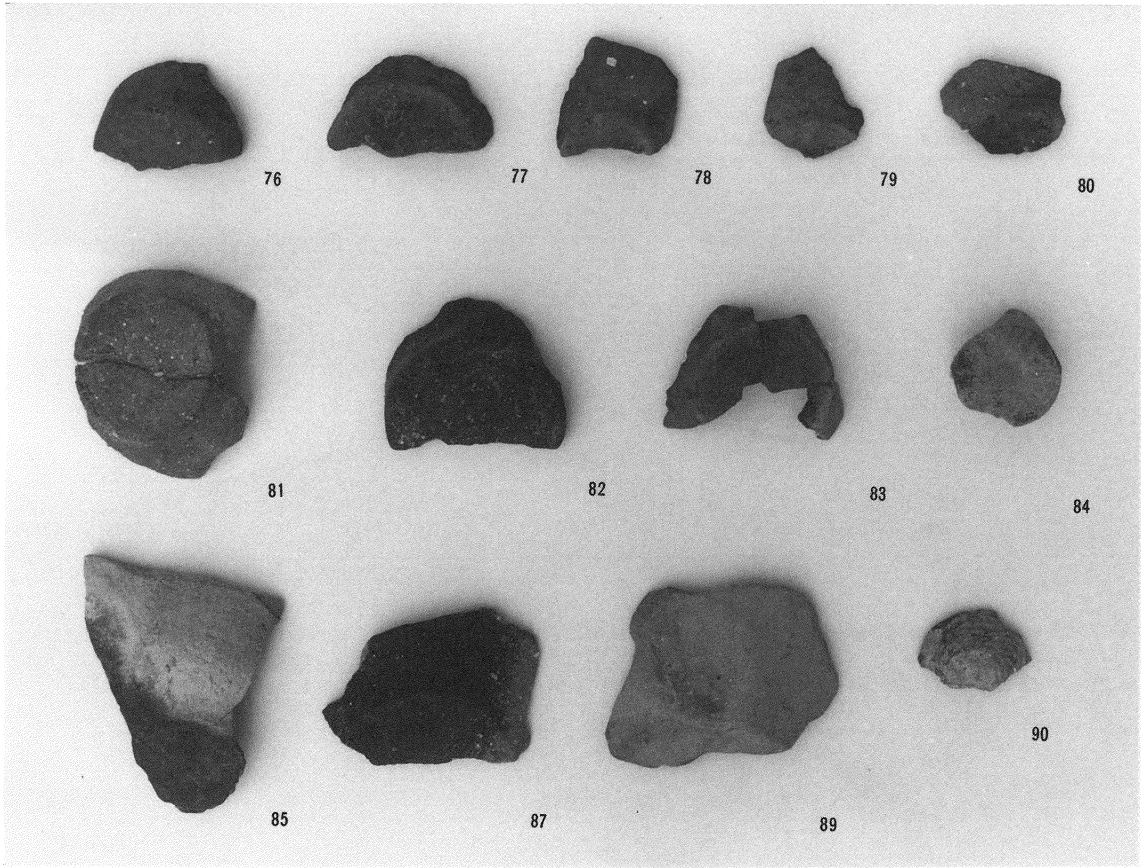
図版 15
LX 06 (拡張前・南東より)・LX 06 (拡張後・南東より)

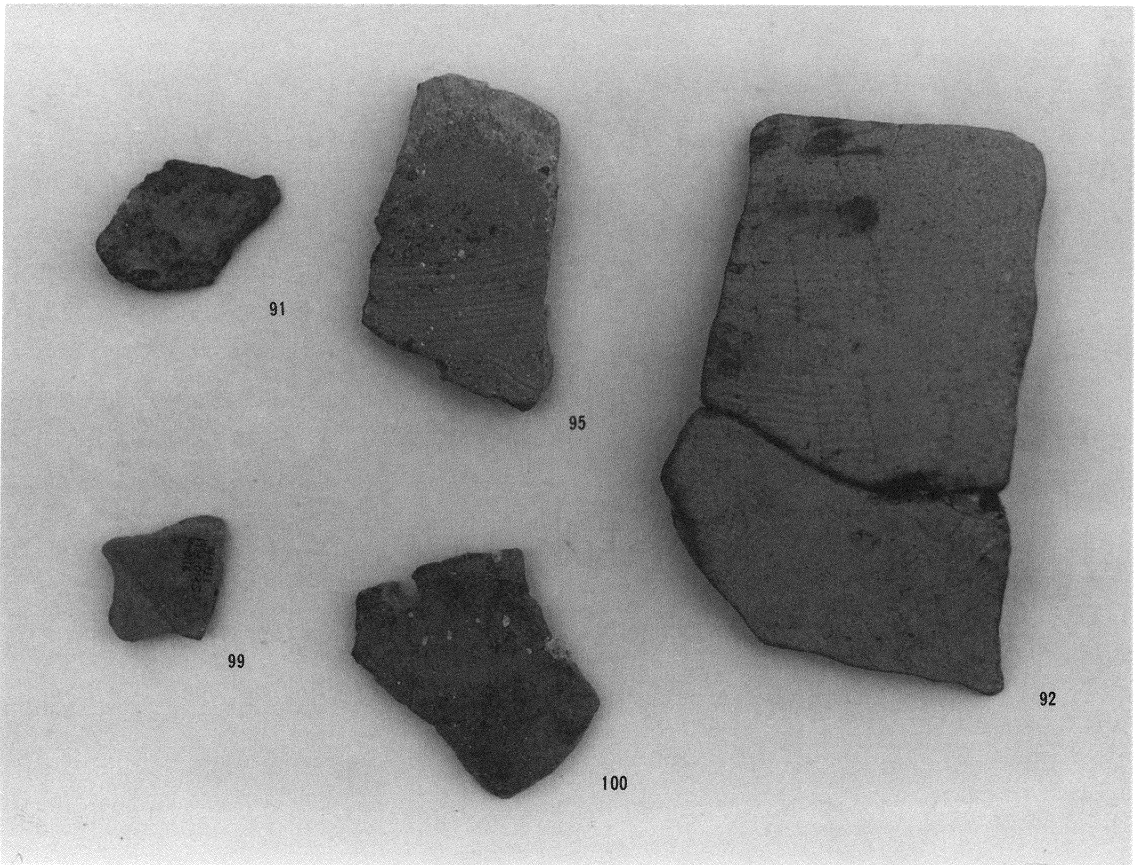
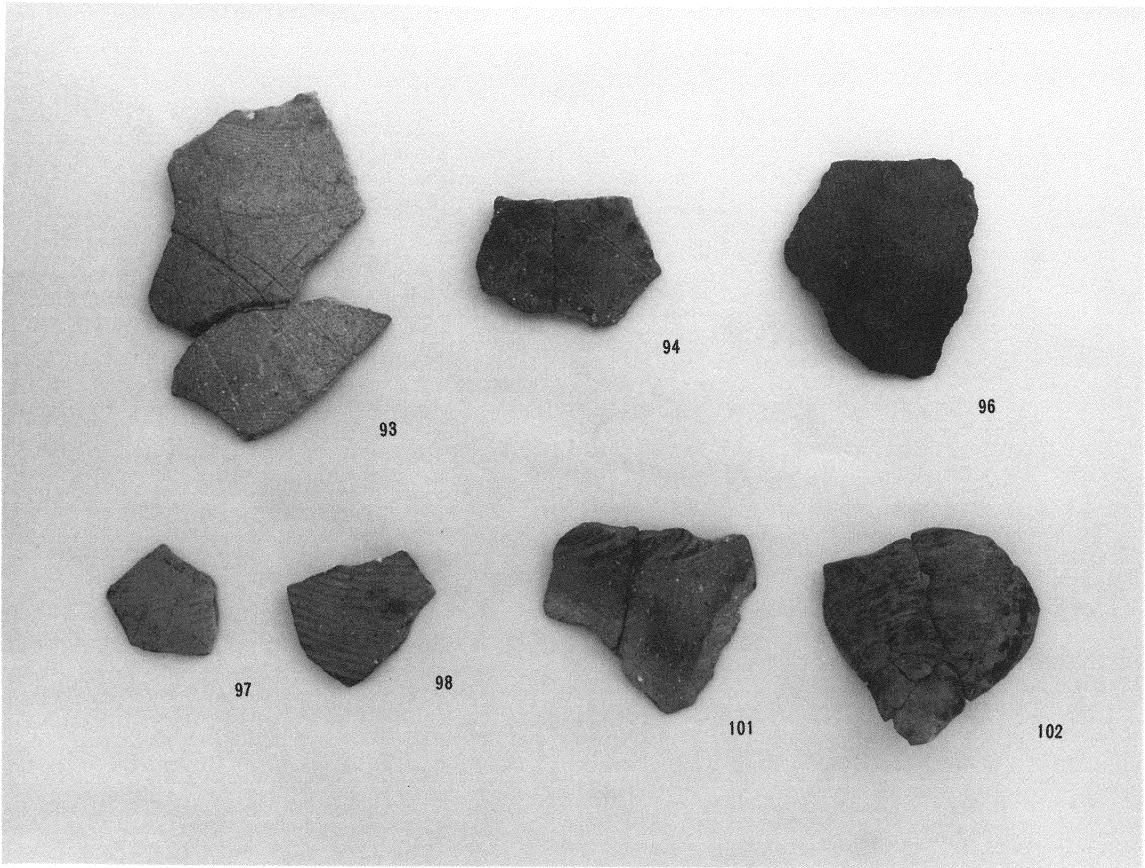


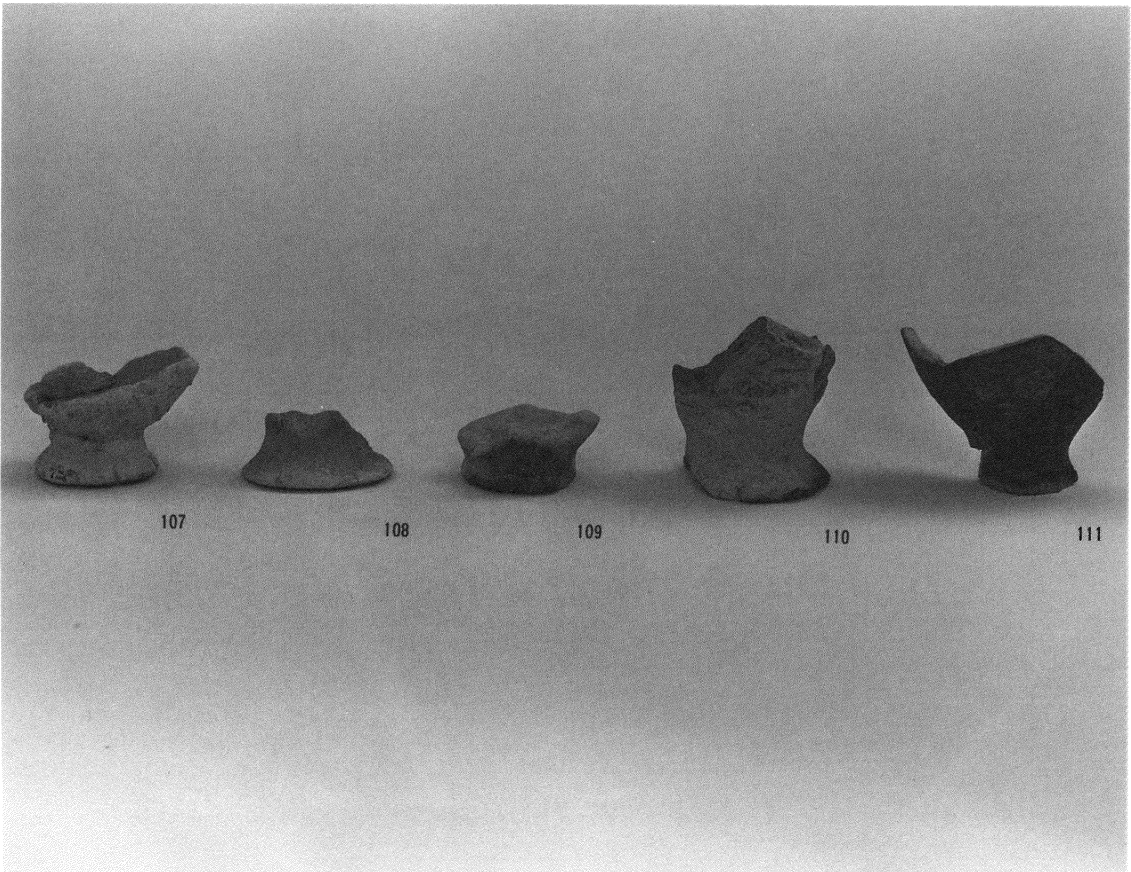
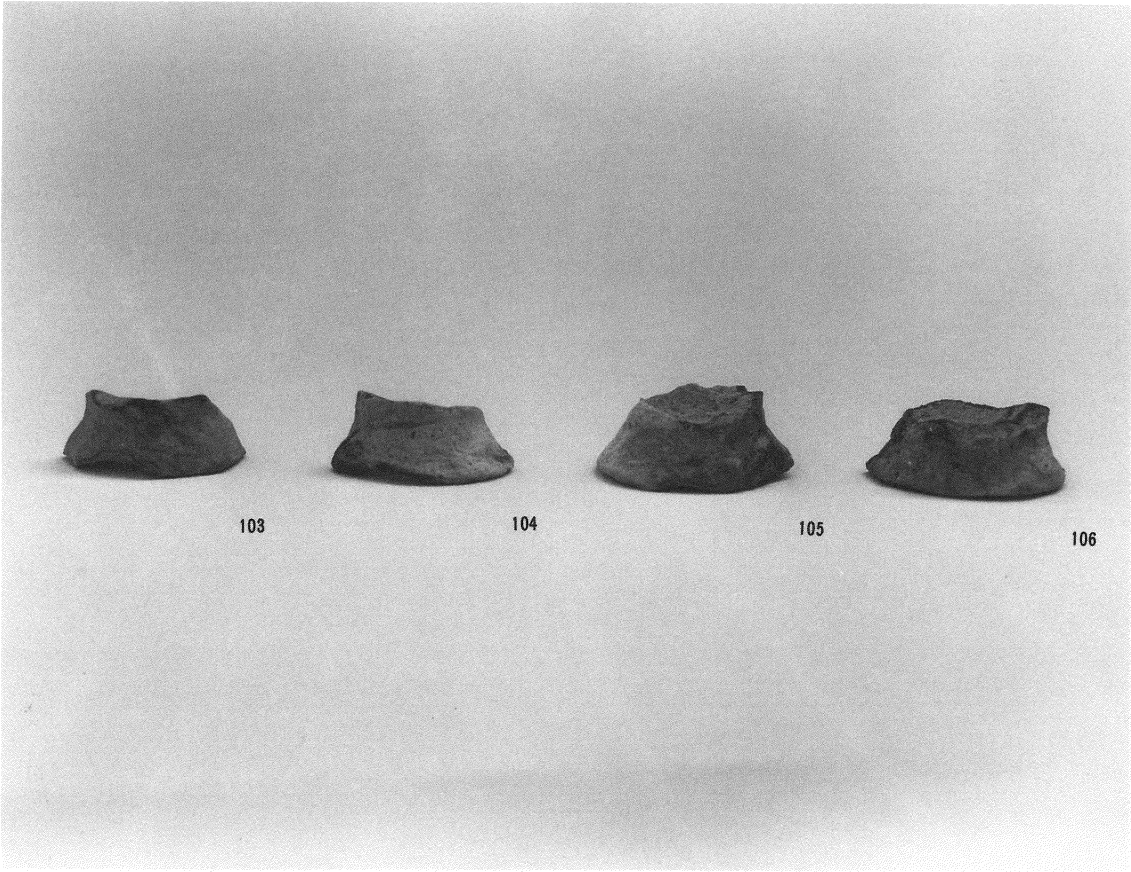


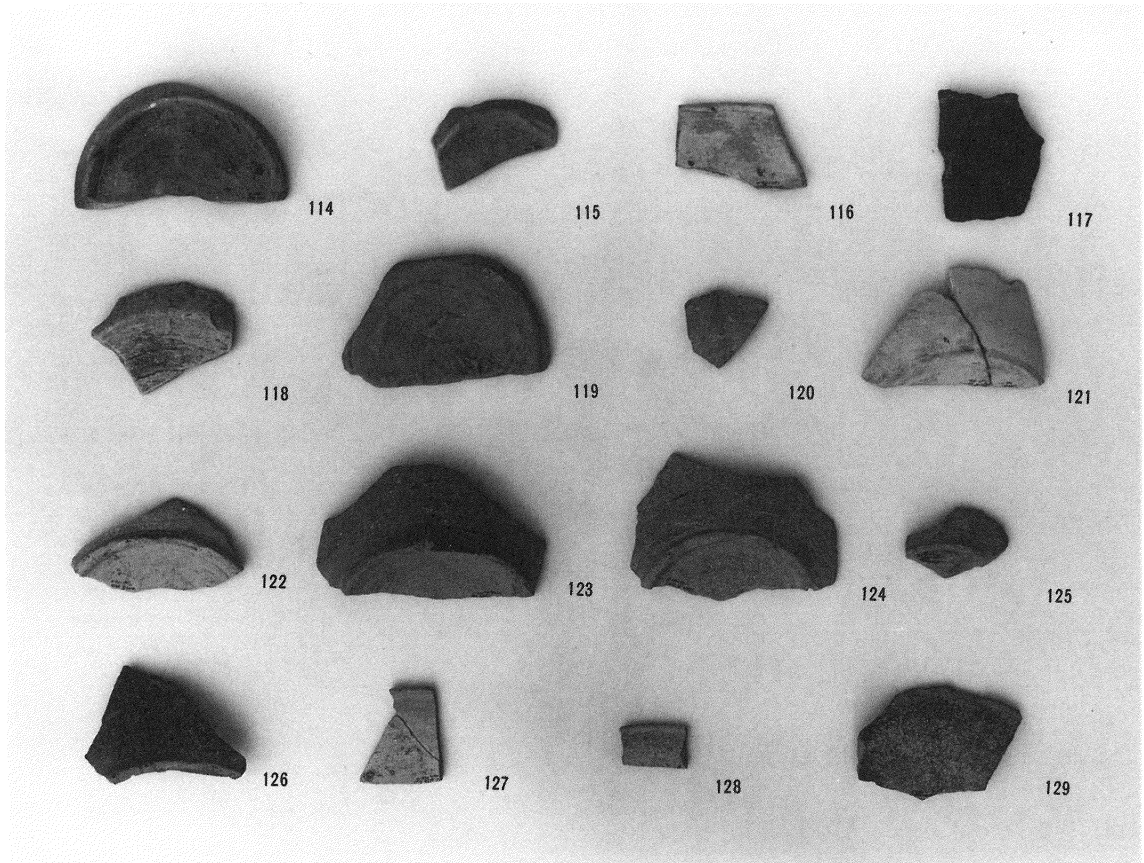
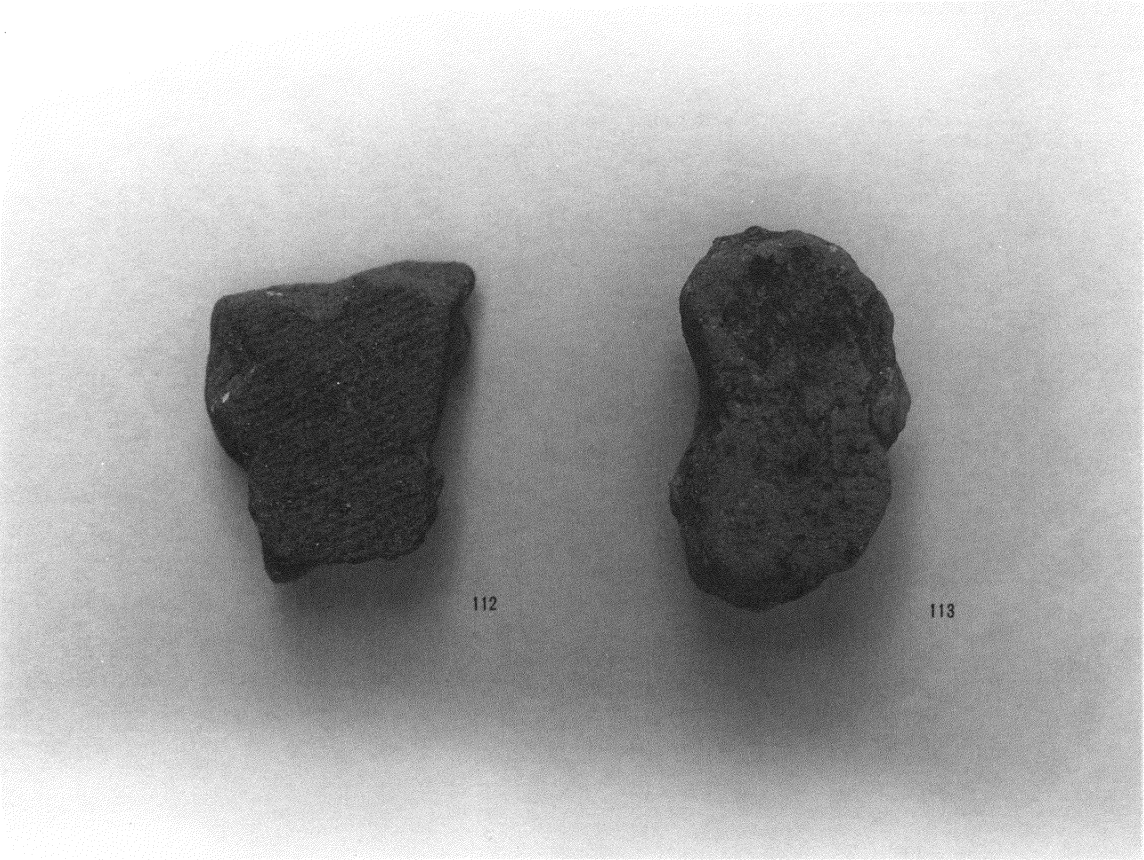


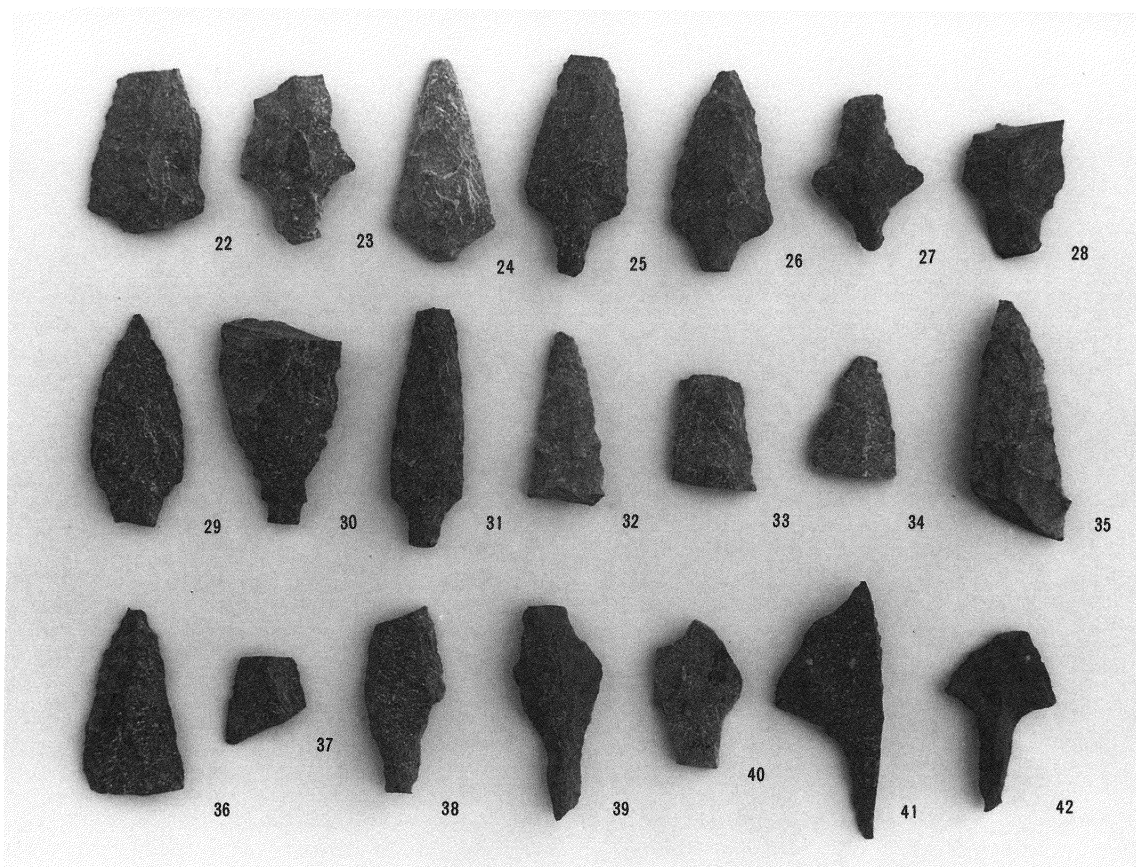
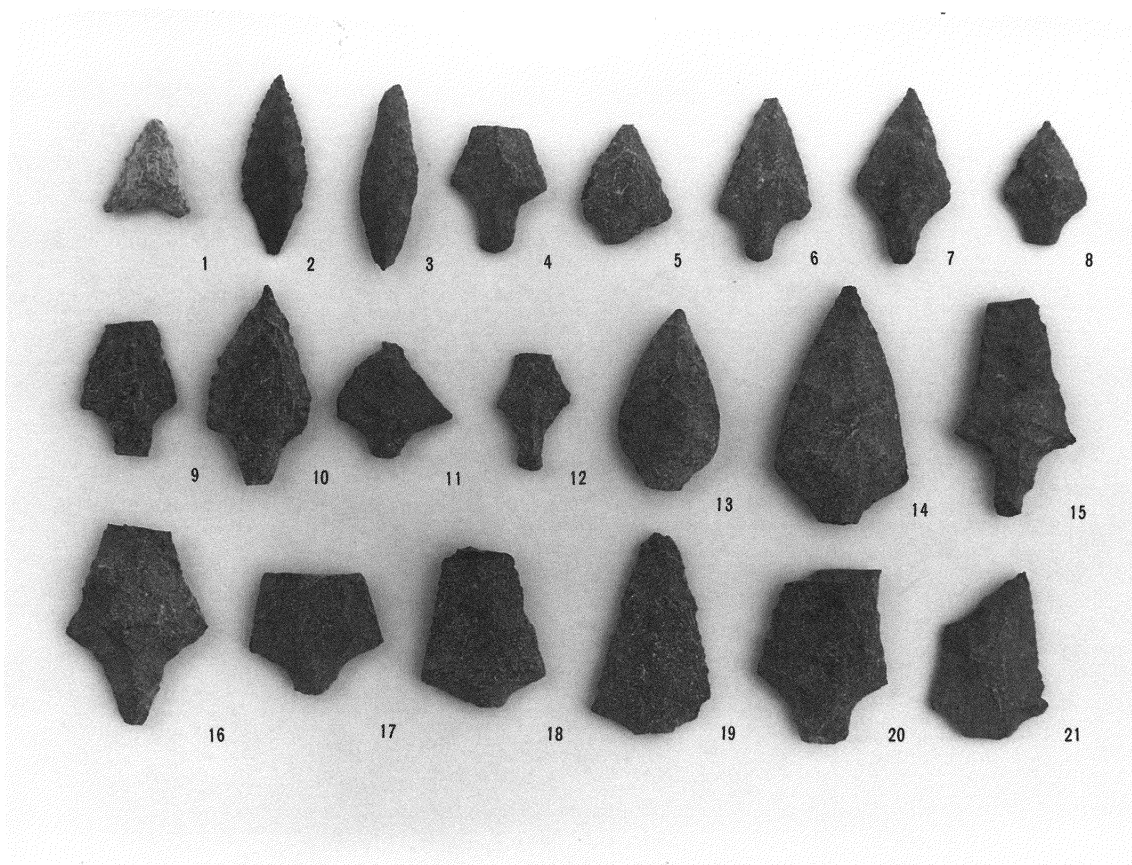


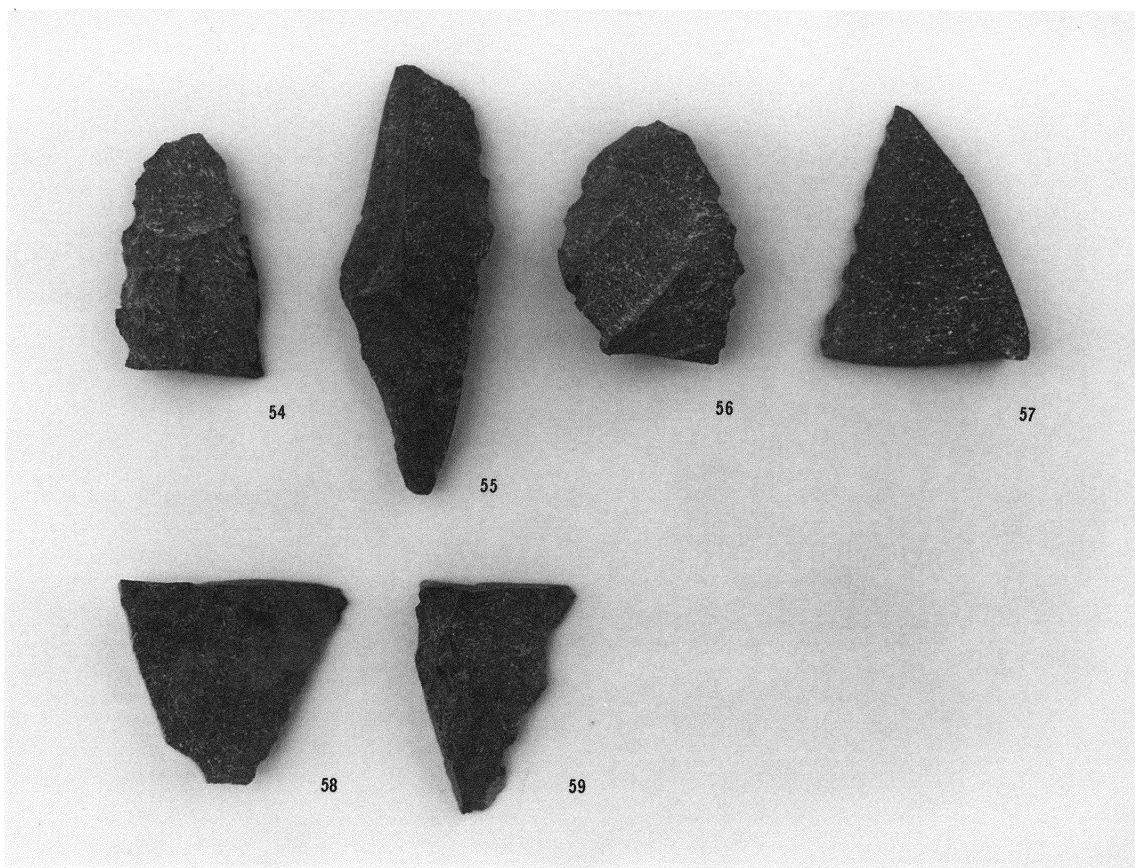
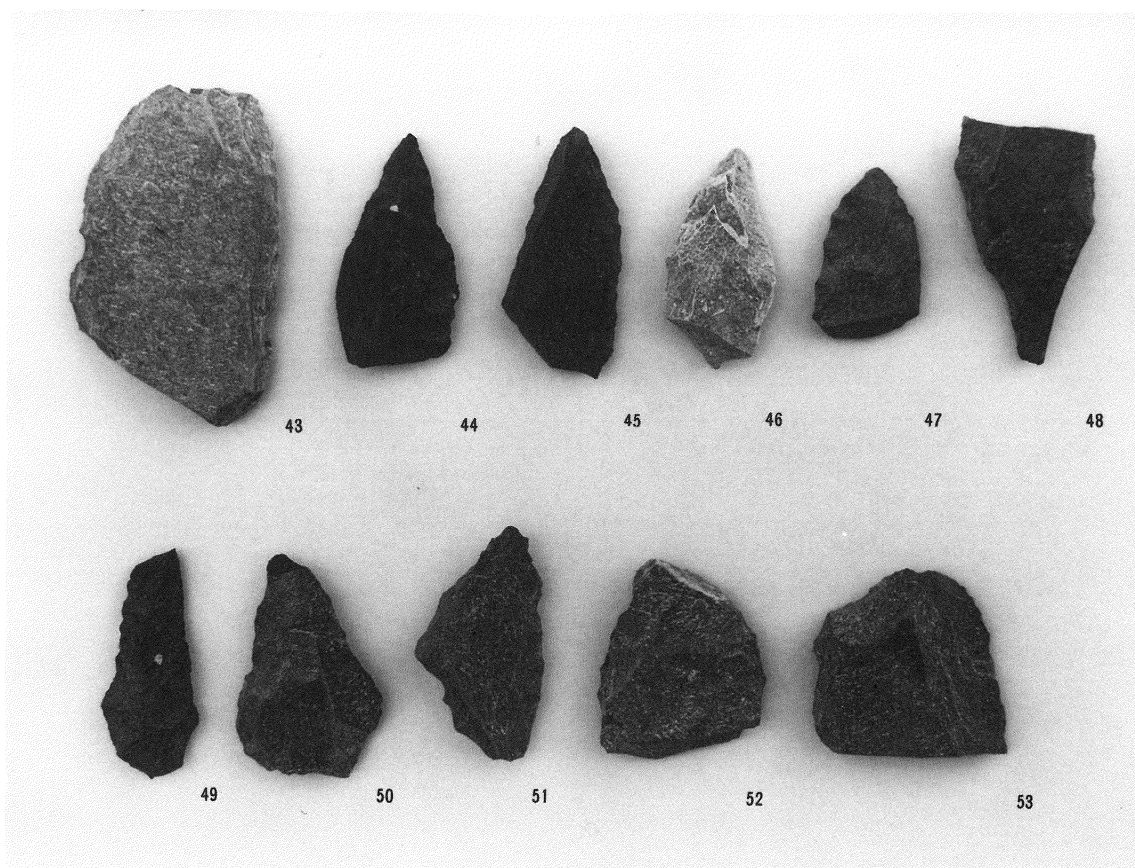


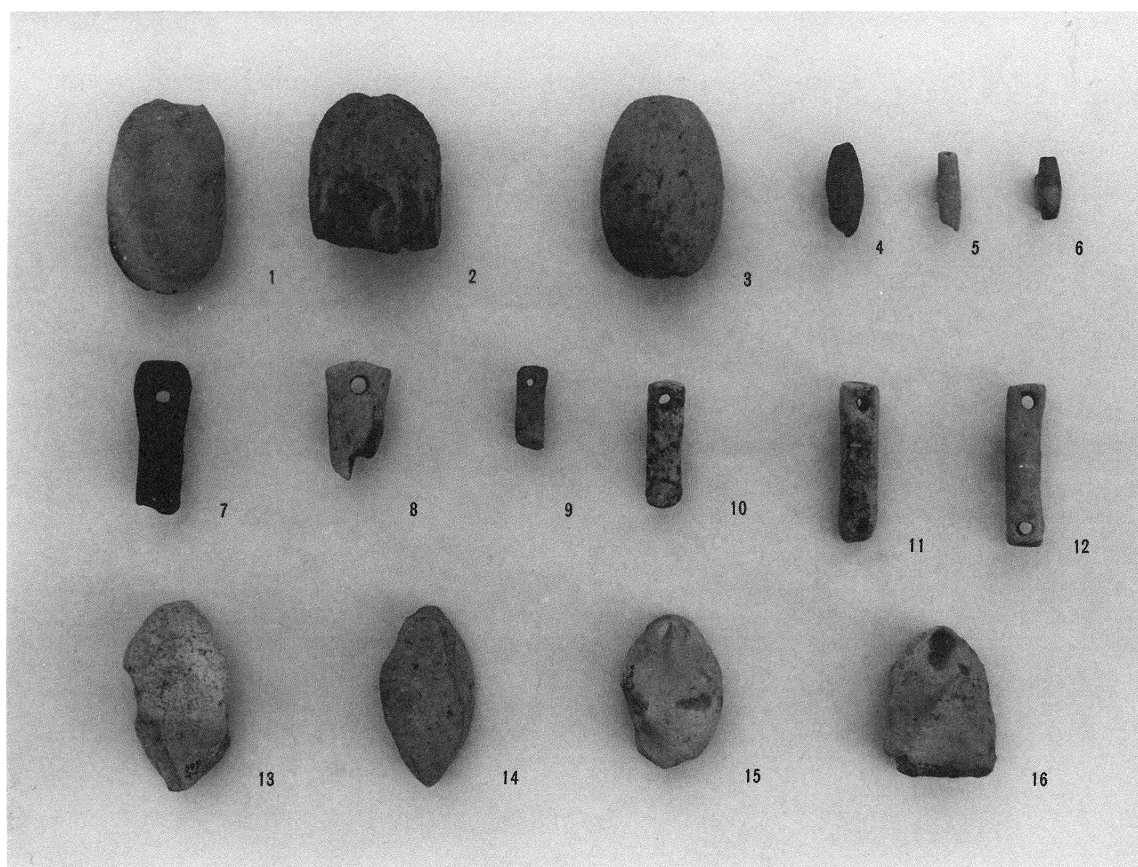
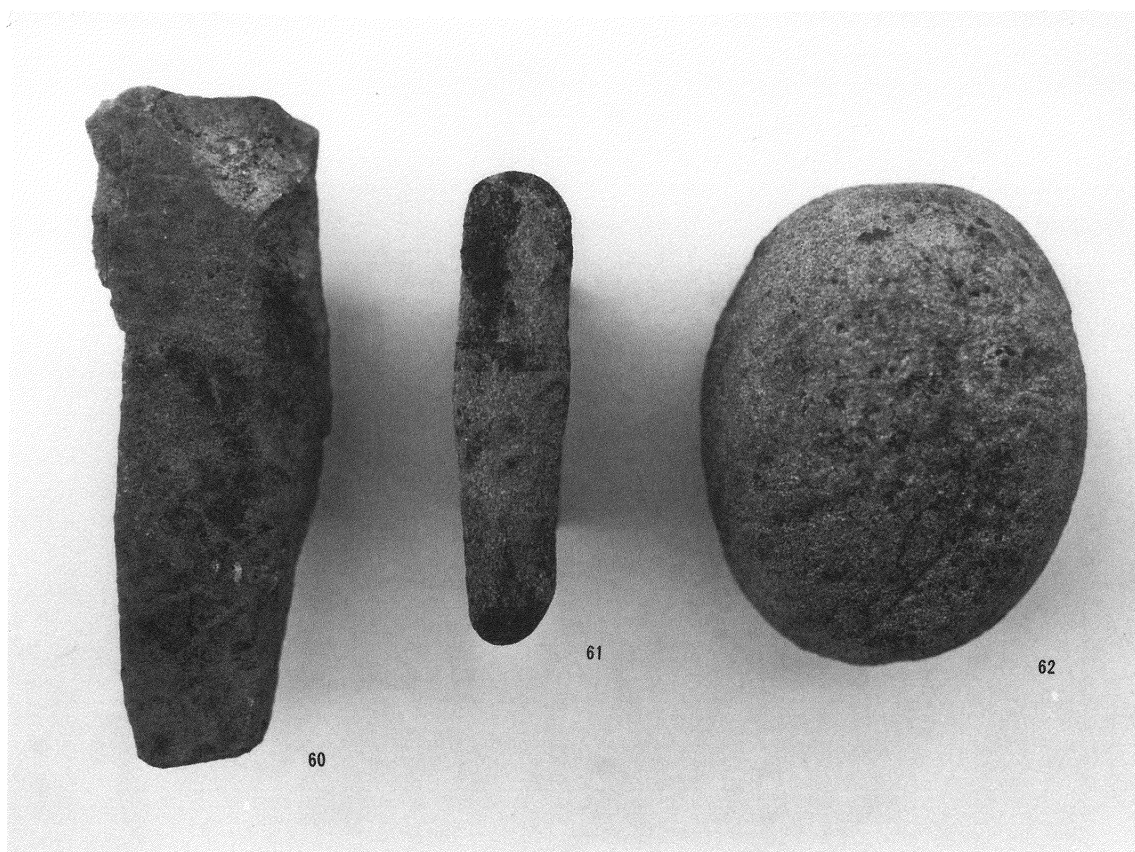












報告書抄録

ふりがな	いわたに いせき							
書名	岩谷遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	南淡町文化財調査報告書							
シリーズ番号	2							
編著者名	坂口弘貢・定松佳重							
編集機関	三原郡町村会（三原郡埋蔵文化財調査事務所）							
所在地	〒656-04 兵庫県三原郡三原町市善光寺18-27 TEL 0799-42-0056							
発行機関および発行年月日	南淡町教育委員会 西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いわたに いせき 岩谷遺跡	ひょうごけん みはらぐん 兵庫県三原郡 なんたんちゆうふくらへい 南淡町福良丙 あざいわたに 22-1字岩谷	28.7041		34° 15′	134° 42′ 37″	1993年 3月11日 ～1993年 5月21日	64 m ²	三原郡 養護老人 ホーム建 設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岩谷遺跡	その他 (遺物包 蔵地)	弥生時代 平安時代	柱穴 土坑 集石 など	弥生土器 石器 土錘 土師器 須恵器 製塩土器 など				

南淡町文化財調査報告書 第2集

岩谷遺跡

平成8年3月31日

発行 南淡町教育委員会

〒656-05 兵庫県三原郡南淡町福良甲512

編集 三原郡町村会（三原郡埋蔵文化財調査事務所）

〒656-04 兵庫県三原郡三原町市善光寺18-27

印刷 株式会社教育出版センター

〒771-01 徳島県徳島市川内町平石流通団地27番地